

※クリックすると記事のページを開きます。

① 2016 年受入（2016 年 11 月）	2
-短期 Joint Education Program 開催報告（タンデム学習）	2
-トビタ日記王立プノンペン大学ショートステイ	4
②2017 年度受入（2017 年 11 月）：トビタ日記王立プノンペン大学ショートステイ	17
③2016-17 年度短期 JEP 参加報告：留学に匹敵する学びの機会 2016 年・2017 年ショートステイプログラムに 参加して	24
④2018 年度受入（2018 年 9 月-10 月）	26
-短期 JEP 報告	26
-短期 JEP タンデム学習実践報告	30
-タンデム学習におけるグループワーク課題（本の紹介 1）in Khmer：『ころろ』（夏目漱石）	36
-タンデム学習におけるグループワーク課題（本の紹介 2）in Khmer：『古都』（川端康成）	38
-タンデム学習の成果 1：ピッチング練習からキャッチボールへ	39
-タンデム学習の成果 2：その人を知ろうとすること	41
-タンデム学習の成果 3：学ぶ機会を大切に	43
-短期留学経験の活用報告：月島第二小学校に関する発表	45
⑤カンボジア語で学ぶ日本史	49
⑥カンボジア語で紹介する日本文学	51
⑦2019 年度受入（2019 年 7 月）	53
-王立プノンペン大学との短期 JEP を開講	53
-実践報告：王立プノンペン大学との短期 JEP におけるタンデム学習	57
-タンデム学習の成果 1：今後のカンボジア語学習に向けて	64
-タンデム学習の成果 2：繰り返すことで身に付ける力	66
-タンデム学習の成果 3：3 作目は駄作	68
-タンデム学習の成果 4：3 年続けて観察した季節感	70
⑧学びたいことはここにある—カンボジア語スピーチコンテストまでの道のり—	72
⑨元交換留学生在カンボジア文学研究賞受賞	74

① 2016 年受入（2016 年 11 月）

-短期 Joint Education Program 開催報告（タンデム学習）

2016 年 11 月 19 日～29 日（ヤンゴン大学）、同 11 月 21 日～30 日（ラオス国立大学、王立プノンペン大学）の日程で、世界展開力強化事業「日本発信力強化に貢献するミャンマー・ラオス・カンボジア知日人材養成プログラム」短期 Joint Education Program が実施されました。



左：カンボジア語のタンデム学習の様子、右：ラオスからプット副学長の講演

ヤンゴン大学 3 名、ラオス国立大学 4 名、王立プノンペン大学 6 名の、計 13 名の学生を受け入れ、本学学生とタンデム学習を行いました。タンデム学習を通じ、双方学生の語学力向上はもちろんのこと、コミュニケーション力、主体的行動力、異文化受容力等を養うことにもつながりました。

また、協定校から来日したラオス国立大学 Phout SIMMALAVONG 副学長および Mixay SOUKCHALEUN 日本語学科長、王立プノンペン大学 Oum RAVY 副学長および Duong CHANMETTACHAMPAVIENG コミュニティ開発科専任講師による講義も行われました。

閉講式には受入学生はもとより、ビルマ語、ラオス語、カンボジア語を学ぶ本学学生も多く参加し、全員で歌ったり踊ったりと、交流の深まりを感じさせるものとなりました。

▼ 学修風景（左：ラオス語のタンデム学習、右：王立ブノンペン大学教員の講演）



▼ 短期 Joint Education Program 閉講式（左：ラオス国立大学、王立ブノンペン大学、右：ヤンゴン大学）



▼ 研修旅行（左：11/24 雪の鎌倉大仏、右：11/26 浅草研修）



▼ 日本文化体験



-トビタ日記王立プノンペン大学ショートステイ

チョムリアップスオ！（カンボジア語で「こんにちは」）

2016 年 11 月 22 日～30 日の 9 日間、本学との協定校であるカンボジアの王立プノンペン大学から学生 6 名、先生 2 名がショートステイで日本を訪れました。ボクも始まる前からワクワク！日本人学生による日本語授業、書道に空手、三味線、鎌倉・浅草研修にカンボジア人の先生による講演、カンボジア人学生の発表と、盛りだくさんの一週間をご紹介します！

11 月 22 日 1 日目

【1】成田到着

日本へようこそ！長旅お疲れ様でした。カンボジア～日本間は飛行機で約 8 時間。4 か月前の 9 月にカンボジアの首都プノンペンー成田との直行便が就航したばかり！ここ成田からリムジンバスで吉祥寺へ向かいます。



【2】日本での初のご飯

外大で日本人学生と合流。この日は、王立プノンペン大学から外大にカンボジア語の先生として派遣されてきているバン・ソバタナ先生が、みんなのためにカンボジア料理を作ってくれました！干し魚、鶏肉とピーマンの炒め物、卵と大根の漬物の炒め物の三品。とっても美味しくて、旅の疲れなんて吹っ飛びました。先生、ごちそうさまでした！



【3】先生方も一休み

王立プノンペン大学より、写真に向かって左が副学長のオム・ラヴィ先生、右が地域開発学科のドウオン・メター・チャンパヴィエン先生です。よろしくお願いします！



【4】ショートステイ開講式

今回は、ミャンマー・ラオス・カンボジアの3国からの学生がショートステイにやってきました。これから約1週間の留学生活、みんな楽しんでください！（僕はどこにいるでしょう）



【5】語劇観賞@外語祭

毎年恒例、2年生によるカンボジア語劇をみんなで鑑賞してきました。今年は「ケンコン蛇」！夫が行商で留守の間、妻は森に棲むケンコンという大蛇と愛し合い、それを知った夫は、、、というカンボジアでも何度も映画化されている物語です。外大でカンボジア語を学ぶ学生が1年生で初めて読む長文のお話でもあります。

客席の一番前で観ていたカンボジア人学生たちに緊張！せずに、堂々と演技切りました！



【6】料理店@外語祭

続いて語劇と共に楽しみなのが料理店！店の名前は「ニャム・ニャム・ポーム」。「口いっぱい頬張って食べる」という意味です。

ここで少し、カンボジア料理をご紹介します・・・今回外語祭で出されていた



カンボジア料理の一つ、モアンチャークニャイ。鶏肉(モアン)をしょうが(クニャイ)と炒めた(チャー)料理で、とにかくご飯がすすみます！でも、でも、、、ボクのことは・・・た、食べないで！！！！ソバタナ先生によると、鶏肉がなかなか手に入らない場所や人によっては、代わりに豚肉やカエルを入れることもあるそう。20歳を過ぎたら、ぜひカンボジアのビールも一緒に楽しんで下さい！



今回のショートステイ期間中は 1 人のカンボジア人学生につき日本人学生が 2～3 人というグループ構成で活動し、この日もそれぞれのグループに分かれて、学内外散策・外語祭を楽しみました。勢いで吉祥寺へ繰り出してみたら、祝日で混みすぎてなかなか食事にありつけず、ぐったりして帰ってくるというグループも・・・！

【7】ラヴィ先生をご案内

副学長のラヴィ先生は、日本の大学で学ばれたことがあります。先生、久しぶりの日本でのお食事はいかがですか？！



11 月 24 日 3 日目

【8】日帰り研修第 1 回～鎌倉～

日帰り研修第 1 回は、鎌倉の高徳院 & 鶴岡八幡宮へ。なんとこの日は、都心で実に 54 年ぶりの 11 月の初雪！！初めて見る雪にカンボジア人学生のテンションも高潮で寒さなんて全く感じませんでした、とはいかずやっぱり寒かった！！なんと絶好のタイミングで雪となり、ボクも大きな大仏と記念の一枚……。みんな短い留学のとても良い思い出となりました。





【9】雪の高徳院を楽しんだ後は、みんなでお昼ごはん。カンボジア人学生の疑問にカンボジア語で対応する日本人学生たち。みんなすごい！ボクもカンボジア語勉強しよう・・チョムリアップスオ！クニヨム、クー、モアン！！（こんにちは！ボクは鶏です！！）



ショートステイの間、活動の一環として各グループの日本人学生が様々な場面で通訳をしました。特に担当のカンボジア人学生と丸一日一緒に過ごす日帰り研修は、日頃勉強してきたカンボジア語を最大限に生かせる絶好のチャンスです！



【10】小町通り～鶴岡八幡宮へ

焼きたてのお煎餅にお団子・・ボクもヒナの時代から大好きな小町通りを通り抜けて、鶴岡八幡宮へ。みんな良い笑顔で到着です！



カンボジアには中国のお寺以外にはおみくじは無いそうで、この日は日本での
おみくじ初体験です。みんな覗き込んで解説中！「中吉はカンボジア語
で・・・」



11 月 25 日 4 日目

【11】講演会 1

この日はプノンペン大学の副学長ラヴィ先生による講演会です。テーマは「カ
ンボジアの高等教育と王立プノンペン大学の国際交流」。みんな真剣で
す！



【12】発表準備

カンボジア人学生たちが最終日に行う発表に向けた準備を行いました。各
自発表テーマを決め、ソコン君が書き出します。



それぞれテーマが重ならないように調整し、その後模造紙を使って準備を進
めます。

「道ばたの新聞売りの少女だった私」「私が生活しているシェアハウス」「カン
ボジア伝統舞踊クラブでの活動」といったテーマを各自設定しました。



【13】日本文化体験教室（1）

午後は、日本文化体験教室が行われました。空手有段者の日本人学生による、空手教室です！外大内の和室に集まり、みんな初めての武道にワクワク。帯の締め方から習って、気合を入れます。



日本人学生も初体験でこの笑顔！！



続いては女性陣。みんな興味津々です。



座り方、姿勢、武道の精神を学びます。



みんなでお手本を堪能！やっぱりカッコいい～！！！！



後に記念写真。みんなキマっています！！

【14】三味線

続いて、同じく外大カンボジア語の学生が三味線を披露してくれました。日本の伝統的な楽器の音色を楽しみました。

実際に楽器に触れることもできました！！貴重な体験です。



【15】カンボジア人学生からのお礼

日本人学生による空手・三味線体験のお返しとして、カンボジア人学生が歌と踊りを教えてくれました。真ん中で歌うのはクンティアさん。盆踊りに似ているようで、手と足の動きが難しい！みんな素敵な歌声と踊り、ありがとうございました！



11月26日 5日目

【16】日帰り研修第2回～浅草～

2回目の日帰り研修は浅草・江戸東京博物館＆浅草寺です！



この字体では、漢字を読むのは難しいかも！！



この自転車、ボクも高校生のときに歴史の教科書で見たことあるやつだ！！！！ボクも初めて乗って、サッバーイ(楽しい)！

浅草内では観光用で今でもよく見かける人力車ですが、今日は江戸時代の人力車を初体験です！

【17】つづいて浅草寺へ。

今日はお天気にも恵まれ、研修日和！と思っていたら目の前にスカイツリーが！！！！これが噂のスカイツリー、やっぱり高い！



浅草寺も、人がいっぱいとても賑わっています。留学生や先生も、鎌倉に引き続きここでも皆おみくじを引いて占い。ちなみに、チャンパーヴィエン先生は小吉だったそう！



浅草で有名なメロンパンや人形焼を食べたり、珍しいピンク色のラムネを飲んだり、大好きなコーヒーをたくさん飲んだり、不思議なお土産を買ったり、とそれぞれが皆仲見世商店街や浅草の町並みを満喫しました。ソンバット君も、外大の男性陣と浅草散策です！ボクも楽しすぎて、ついどアップ・・・



11月28日 7日目

【18】講演会 2

第2回講演会は、チャンパーヴィエン先生による「カンボジアの地域開発」。カンボジア語から日本語への通訳は4年生が担当しました。1～4年生が聴講し、質問もたくさん出て、第1回に引き続きとても有意義な時間となりました！



【19】ランチ

ショートステイ期間には、外大内でみんなでお昼ご飯を食べられる日が3日ほどありました。食堂の席を先に確保し、今回のショートステイプログラムに参加していないカンボジア語を学ぶ学生もたくさん集合し、みんなでワイワイお昼を楽しみました。カンボジア人学生に特に



人気だったのは、食堂のラーメンや生協で売っているカップスープなどの麺類！そういえば、前に外大に来ていた留学生も、みそラーメンが大好きだったっけ・・・

【20】日本語クラス

この日は、カンボジア語を学ぶ日本人学生による日本語授業が行われました。学生が事前に作成したオリジナルテキストを使いました。



「私の名前は～です。〇〇が大好きです。」といった自己紹介文を、それぞれ留学生に〇〇の箇所に好きな内容を入れて文章を完成させてもらいます。「写真を撮ることが好き」「買い物に行くことが好き」「木が好き」など、言いたいことを日本人学生がそれぞれ傍について言い方・書き方を教えます。



皆、各自で作成した文章を声に出して何度も読み、自主的に練習していました！それぞれが違った内容で、言いたいことを日本語で話すことができていました！！



実は、この次の時間は「書道体験」が予定されており、みんなそれぞれ自分の名前を“漢字で”書くことになっているのです！もちろん、カンボジア人の名前はカンボジア語(カンボジア文字)なので、書道の先生が、みんなの名前の音に合いそうな漢字を選んで、当て字で漢字の名前を考えてくださいました。（たとえば、「チャンパーヴィエン」のヴィなら漢字で「美」といったように。）



そしてこの日本語授業では、それぞれの名前に使われる漢字一語一語の意味を、日本人学生が一つ一つ説明しました。「美」という文字が出れば歓声が上がったり、数字の「八」が出れば笑いが起きたりと、とても和気あいあいとした授業となりました！

【21】書道体験

続いての書道体験は、勝田先生のご指導のもと行われます。みんな道具に触るのも初めて！まずは墨をするところから体験です。

さっそく筆をおろして、各自自分の名前を書いてみます。それぞれの名前のお手本は、事前に勝田先生が用意して書いてきてくださいました。皆姿勢もよく、とっても上手に書けていてビックリ！！





みんな見よう見まねで挑戦してみます。授業のサポートで参加した日本人学生も書道は久しぶりという学生がほとんどで、記憶を辿りながら、筆、文鎮、半紙の裏表など、書き方のアドバイスを行いました！



皆夢中で、何枚も練習していました。書いたものと道具は記念にお土産としてお持ち帰り。カンボジアでもぜひ披露してみてください！



11 月 30 日 最終日

【22】カンボジアでの大学生活@多言語ラウンジ

発表はすべてカンボジア語ですが、前半は日本人参加者が上級生のみということで通訳はなしでの発表です。1 週間のショートステイ後の課題です！！



発表を終え、ホッと一安心の 3 名です。発表お疲れ様でした！！



発表後半は、授業を終えた多くの日本人学生が発表を聞きに来ることができ、また先生方も含め沢山の人が集まりました。中でも自分で洋服を作ってインターネットで販売までしているという発表には皆驚き！先生もサイトのアドレスをメモしていました笑 質問もたくさん出て、とっても盛り上がった発表となりました。



【23】閉講式

発表後、多言語ラウンジではカンボジアとラオス合同のショートステイの閉講式が執り行われました。閉講式では、一人ひとり名前を読み上げられ、本学の林佳代子副学長より「参加証明書」が授与されました。皆、証明書を受け取り、今日までの一週間のショートステイを振り返ります・・・ ショートステイ、どうだった？とボクが聴くと、「もっと日本にいたい！」「一週間あっという間で、足りない～」と、みんな日本での留学が終わるのがとっても惜しい様子。



記念写真撮影後は、ラオスからの留学生より、踊りのプレゼントがありました。カンボジア人・日本人学生も混ざり、「難しい！」「どうやって踊るの？」と言いながらも、皆初めてのラオスの踊りを楽しみました。



そして、カンボジアの留学生もお礼としてカンボジアの伝統的な踊り「アラッピヤ」を披露。皆で輪になって踊り、ショートステイ後の交流を楽しみました。ラオスの皆さん、カンボジアのみなさん、素敵なプレゼントありがとう！！



閉講式後の交流会では、お菓子を食べながら、たくさん写真を撮りながら、日本人学生・先生との後の時間を過ごしました。

後にソバタナ先生より、浮世絵のデザインのファイルをお土産に頂きました！！ 日本でのプレゼントに、とってもいい笑顔です！！



【24】成田へ 閉講式が終わると、急いで着替えて早速移動です！ 帰りは調布駅からリムジンバスで成田へ・・・ あっという間のショートステイ、でも充実した一週間、お疲れ様でした！！ 日本での留学を終え、これからみなさんが日本とカンボジアをつなぐ架け橋となることを、僕も楽しみにしています！！



②2017 年度受入（2017 年 11 月）：トビタ日記王立プノンペン大学ショートステイ

2017 年 11 月 22 日、カンボジアの王立プノンペン大学の学生たちが、8 日間の学習プログラムに参加するため、はるばるこの東京外国語大学に来てくれました。外語祭見学に小学校でのカンボジア文化紹介、空手や着付けの体験など、どたんぱったん大騒ぎのショートステイの内幕をご覧ください！

11 月 22 日（1 日目）

【1】プログラム開講式

今回カンボジア人学生たちの引率をしてくれる、王立プノンペン大学国文学部長のティア・ソクメン先生（左）と、副学部長補佐のイト・プティアリカ先生（中央）です。よろしくお願いします！



今回来てくれたのは、王立プノンペン大学の学生 6 人、先生 2 名です。

さあ、一週間のショートステイの始まり！

ショートステイ中はカンボジア人学生 1 人と日本人学生 2～3 人でグループとなって活動します。開講式で、グループのメンバーとご対面！さっそくカンボジア語で自己紹介！チョムリアプ・スオ！クニョム・チモホ・トビタ！（こんにちは！ボクの名前はトビタです！）

【2】学外研修の準備①

プログラムの 3 日目で、都内の小学校でカンボジアについての出張授業をします。そこで披露する歌とダンスをカンボジア人学生と一緒に練習しました！む、むずかしい？これ・・・

11 月 23 日（2 日目）

【3】ソクメン先生の講義

2 日目の最初はソクメン先生による「プノンペン大生の読書傾向」についての講義です。国文学部の学生がどんな本を読んでいるのか、本の入手方法や、読書の習慣がある学生が少ない理由などについて詳しく解説してくれました。先生が文学の道に進むきっかけとなった出来事についても話してくださいました。講義の際は、日本人学生が通訳を担当しました。

【4】日本語授業

お昼ご飯の後、日本人学生による日本語の授業が開かれました。実は、このプログラム期間中に「ホームビジット」という企画があり、カンボジア人学生は各自で電車に乗ってホームビジット先のお宅まで行くことになっているのです。かんたんなあいさつの練習の後、「〇〇に行きたいです」「この電車です」など、電車に乗るときに使える表現を声に出して練習しました。カンボジア人学生のみんなは覚えるのが速く、すぐにすらすら自己紹介できるようになってびっくり！会話の練習の後、自分の名前をカタカナで書く練習をしました。覚えた日本語、ちゃんと使えるかな？

【5】学外研修の準備②

小学校での発表に備え、今日は「クロマー」というカンボジアの布の使い方をみんなで練習しました。頭に巻いたり、腰に巻いたり、かばんにしたり、いろんな使い方があるんだって！すごいね、便利～！ボクにも巻いてほしいな！

次に、小学校で行うプレゼンの準備。それぞれのグループでテーマを選び、カンボジア人と日本人が協力して発表資料を作りました。

小学生が見てもわかりやすいように、イラストを書いたり、表や解説を書いたり。各グループが趣向を凝らした資料を作っていました。

そして今日も最後はダンス！

11月24日（3日目）

【6】学外研修①月島・浅草

今日は中央区の月島第二小学校にお邪魔してきました。チョムリアブ・スオ（こんにちは）！

体育館でカンボジアの歌とダンスと一緒に練習！慣れないステップに子供たちは戸惑っていたけど、最後はみんなで歌に合わせて踊りました！

【7】ダンスの後、グループごとに分かれて教室でカンボジアについてのプレゼンです！この時、前日覚えた日本語であいさつ、自己紹介するカンボジア人学生も！すごい！プレゼンが始まると、子供たちは初めて聞くカンボジアの生活や文化の話に興味津々。ここではカンボジア人学生が発表し、日本人学生が頑張って通訳しました。みんなすっごーい！

このグループはカンボジアのあいさつ（合掌）について発表。あいさつする相手によって手の高さを変えるんだって。他のグループは「カンボジアのお寺」や「国旗」などについて話しました。

発表の後は、カンボジア文字で子供たちの名前を書いてあげました。む、難しい・・・

次に、「クロマー」の使い方をレクチャー。

【8】授業の後は、待ちに待ったおいしい給食の時間！僕たちもごちそうになりました！

月島第二小学校のみなさん、オー・クン（ありがとう）！

【9】スカイツリー & 浅草寺

午後は浅草見学に行きました！まず向かったのは、東京スカイツリー！真下から見ると、写真に入りきれないほど大きい・・・

浅草の雷門・仲見世通り・浅草寺を見学！カンボジア人学生のみんは、たくさん写真を撮って、SNS にアップしてました。もっといっぱい見たかったなあ・・・

11月25日（4日目）

【10】学外研修②房総のむら

バスに乗って、千葉県立博物館房総のむらに行ってきました。江戸時代の街並みを再現した通りや、伝統的な農家や畑を見ることができます。カンボジア人学生と日本人学生はグループに分かれて、ストラップやロウソクづくり、玄米茶づくりなどの体験に参加しました。

このグループはたたみのストラップを作りました！見て見て、ボクがのるのにちょうどいい大きさだよ！



【11】茶道体験

房総のむらでは茶道のお点前も体験できました。本格的な茶室でお作法を教わって、いざ、いただきます。

リカ先生、初めてのお抹茶はいかがですか？



11月27日（6日目）

【12】発表準備

最終日に大学内で行う発表に向け、カンボジア人学生たちは準備をしました。今回はカンボジア全体のことではなく、自分自身の生活や趣味にかかわるテーマを各自で選んで話します。



どんな発表になるのか、楽しみだな～！

【13】空手体験

大学院生の調さんが空手の稽古をしてくれました。調さんは有段者、しかも五段！カンボジア人学生たちは初めて見る本格的な空手の技にびっくり。さあ帯を巻いて、練習開始！お願いします！

先生のレクチャーを受けて、いざ実践！えいや！



【14】着付け体験

大学内の国際交流会館で、和装の着付けの体験をしました。

男性は袴、女性は振袖をお借りして、着付けてもらいました。女性は振袖の柄や髪飾りも自分で選びました。みんな、似合ってるよ！



カンボジア人学生たちは晴れ着姿で写真をたくさん撮っていました！確かに、インスタ映えるよね・・・！

11月28日（7日目）

【15】小田原ツアー

今日は学校を飛び出して、神奈川県の小田原城にレッツゴー！

【16】花王工場見学

お城のあとは、花王の小田原工場の見学です。この工場は主に化粧品を製造している工場で、化粧水や乳液の製造ラインを見せてもらいました。女性（学生も先生も）は試供品に目を輝かせていました。男性陣も試供品を使わせてもらい、肌のスベスベっぷりに感激。ボクも化粧品は初体験！



最後にお土産ももらって、大満足！花王小田原工場の皆さん、ありがとうございました。

11月29日（最終日）

【17】リカ先生の講義

リカ先生が、女性のキャリアについての講義をしてくれました。昔と現代のカンボジア社会での女性の役割の説明のあと、子育てをしながら教員として働く先生自身の経験をもとに、女性が社会でキャリアを積んでいく上で大切なポイントについて話してくださいました。日本人学生は1年生も聞きに来ていました。今回も日本人学生が通訳をしました。

【18】ブノンペン大生の発表

2時限目はカンボジア人学生による発表です。

自分の海外旅行経験や余暇の過ごし方、ボランティア活動などに

ついて発表しました。日本人学生も積極的に質問し、発表会は大いに盛り上がりました。



【19】学食で昼食

日本で最後のお昼ごはん！ 外語祭が終わり、学生食堂が営業を再開したのでみんなで食堂に。

メニューがたくさんあって、迷っている様子。今回のカンボジア人学生には、どんぶり物が人気みたい？

日本人学生も集まって机を囲み、会話を交えながら楽しいひと時を過ごしました。



【20】プログラム閉講式

昼食の後、他言語ラウンジにて閉講式が行われました。本学の林副学長からカンボジア人学生一人一人に参加証明書が授与されました。みんな、8日間おつかれさま！

閉講式の後の交流会では、お菓子を食べながら別れを惜しみ、会話を花を咲かせていました。カンボジア人学生は日本人学生に「カンボジアにはいつ来るの？」と尋ねていました。



そしていつの間にか踊り始めるカンボジア人学生たち。日本人学生や先生も混ざって、日本での最後の時間を楽しみました。

【21】お別れ

8 日間のプログラムを終え、カンボジア人学生と先生はバスに乗って成田空港へ。再会を約束し、日本人学生たちとお別れです。みんな、ありがとう！

このプログラムを通して、カンボジア人学生のみんなが日本についての理解を深め、日本とカンボジアをつなぐ架け橋となることを期待しています！

③2016-17 年度短期 JEP 参加報告：留学に匹敵する学びの機会 2016 年・2017 年ショートステイプログラムに参加して

小林凌（言語文化学部カンボジア語 4 年）

東京外国語大学では、Joint Education Program の一環としてショートステイプログラムが実施されました。カンボジアの王立プノンペン大学から学生を招き、東京外国語大学でカンボジア語を学ぶ日本人学生と一緒に、約一週間にわたって様々な活動に参加しました。日本人学生が浅草や鎌倉などを案内し、日本の歴史や文化について理解を深めてもらったり、カンボジアの



文化についてのプレゼンをするために一緒に資料を作ったり、一緒に工場見学をしたり、など、その活動は多岐にわたります。来日するカンボジア人学生は皆日本語が一切わからないため、日本人学生はプログラム期間中つねにカンボジア語でコミュニケーションをとることを求められます。留学に行ったことがない学生にとっては、生のカンボジア語の中に身を置く絶好のチャンスであり、語学力向上のまたとないチャンスです。

ただ一緒に机を並べて勉強するのではなく、外に繰り出して歩きながら、しゃべりながら勉強するというのはとても有意義な時間でした。語彙を増やし、発音を矯正するなどの言語的な面だけでなく、どんなものに興味を示して足を止めるか、どんなものを美しいと思って写真を撮るか、どんなタイミングで雑談を始めるか、といったカンボジア人学生の行動のクセ・特徴についても直接知ることができました。短い期間だからこそ、日本人の行動パターンとは違うカンボジア人の行動パターンはより強く印象に残りました。第一回目のプログラムでこのクセを知ったおかげで、翌年のプログラムでは自由行動の際のスケジュールに余裕を持たせて集合時間に遅刻しないようにすることができました。行動パターンを事前に把握してから案内したおかげで、カンボジア人にも体力的負担やストレスをかけずに済んだのではないかと考えています。



第一回プログラム終了後、プノンペンに旅行に行った際、プログラムで知り合ったカンボジア人学生と再会しました。携帯電話を安く契約できるよう交渉してくれたり、行きつけのカフェに案内してくれたり、バイクで市内観光に連れて行ってくれたり、滞在中あらゆる場面でお世話してもらい、ショートステイのときに繋がりを作っておいて本当に良かったと思いました。プログラムで得たことの中では、語学力の向上や文化の相互理解といったことよりも、カンボジアで待っている友達ができたということが私には嬉しいことでした。友達ともっとたくさん話すために、カンボジア語をもっと勉強しようという気持ちにもなれました。

ショートステイ自体は約一週間の短い時間ですが、その後もカンボジア人学生と積極的に繋がりが続けられれば、生のカンボジア語にずっと触れ続けることができるという単純な事実を改めて実感しました。私は留学には行きませんでしたが、ショートステイから始まる交流は、留学に匹敵する学びの機会だと感じています。

（記：2018 年 1 月）

④2018 年度受入（2018 年 9 月-10 月）

-短期 JEP 報告

2018 年 9 月 25 日（火）から 10 月 3 日（水）まで、大学の世界展開力強化事業「日本発信力強化に貢献するミャンマー・ラオス・カンボジア知日人材養成プログラム」の短期 Joint Education Program で、6 名（大学院生 1 名、学部生 5 名）の王立プノンペン大学（カンボジア）の学生を受け入れました。



開講式

このプログラムでは、本学カンボジア語専攻の学生と王立プノンペン大学の学生がともに行うタンデム学習が行われました。タンデム学習は、4 人ずつのグループにわかれ、カンボジア語で行われました。授業として参加した本学の学生 19 名にとっては、これまで学習を重ねてきたカンボジア語の運用能力を実践するよい機会になりました。



タンデム学習（１）：お互いの国の本の紹介

また、タンデムの一環として、中央区立月島第二小学校の国際教室「カンボジアを学ぼう」のワークショップの企画と準備をしました。準備中は、秋学期の始まる前の週ということもあり、さまざまな国の留学生が見学に訪れ、交流しました。



タンデム学習（２）：ワークショップの企画と準備

小学校で行われたワークショップ本番では、午前中は５年生の児童と先生方など約１００名と一緒に、体育館でカンボジアの歌と踊りを練習した後、３教室に分かれて、計９グループで、カンボジアの文化を紹介するポスターセッション、カンボジアの文字で自分の名前を書く体験など体験型ワークショップを行いました。お返しに、小学生からは、日本紹介がありました。午後は、２年生の児童と先生方など約１００名と一緒に、カンボジアの伝統芸能であり無形文化遺産である大型影絵の実演をしました。



体育館で踊りの見本をみせて指導する様子（月島第二小学校）



大型影絵を実演する様子（月島第二小学校）

カンボジア人学生は、本学の留学生日本語教育センターで編纂された教科書『留学生のための日本史』を使って日本の歴史を学んだ後、深大寺（調布市）、江戸東京たてもの園（小金井市）を訪問し、教科書で学んだ知識を自分の目で確認しました。各訪問先でも、タンデム学習としてグループ行動をし、本学学生がカンボジア語で説明をしました。留学生たちは、さらに、空手、着付けなどの日本文化体験も行いました。



空手体験



着付け体験

学生交流のほか、引率としてワ・サオピア国文学部教授が同行し、「カンボジアの国文学の現状」、「母語と外国語学習について」の講演会が行われました。

10月2日（火）には、本学の林佳世子理事・副学長とワ・サオピア国文学部教授が、「ASEAN+3 学生交流と流動性に関するガイドライン」に基づく単位互換や質の保証について協議し、両大学の協力関係の発展について意見交換をしました。



右から、林佳世子理事・副学長とワ・サオピア国文学部教授

短期 JEP の様子は本学 YouTube: TUFS Channel からご覧いただけます。

◆カンボジアからの交換留学生（短期 JEP）の発表「大学に入るまで」の一部

（カンボジア語、日本語字幕付き）

[Ret Saron（レット・サロン）さん](#)



◆カンボジアからの交換留学生（短期 JEP）の閉講式の挨拶

（カンボジア語、日本語字幕付き）

[Thai Vanny（タイ・ワンニー）さん](#)



-短期 JEP タンデム学習実践報告

2018 年 9 月 25 日（火）から 10 月 3 日（水）まで、大学の世界展開力強化事業「日本発信力強化に貢献するミャンマー・ラオス・カンボジア知日人材養成プログラム」の短期 Joint Education Program で、6 名の王立プノンペン大学（カンボジア）の学生を受け入れました。

このプログラムでは、本学カンボジア語専攻の学生と王立プノンペン大学の学生がともに学ぶタンデム学習を行っています。本学の学生は、集中講義（地域言語 A）として履修します。3 年目となる今年は、1 年生から 4 年生までの 19 名が履修しました（1 年目 17 名、2 年目 16 名が履修）。

6 名の王立プノンペン大学の学生は、1 名をのぞき、日本語学習の経験はありません。授業はすべてカンボジア語で行われました。本学の学生は、留学生たちに「知日人材」への第一歩を踏み出してもらうべく、タンデム学習に参加する前に、以下の準備をしています。

- ・それぞれの語学力にあわせた目標をたてる。
- ・自分が紹介する本の説明文を書いて、発表できるように用意しておく。
- ・校外研修先で説明できるように情報を調べておく。

目標の例としては、以下のようなものがありました。

- ・苦手な発音を意識して、区別して話せるようになる
- ・分からない語彙は必ず聞いてメモし、語彙集をつくる
- ・教科書で習わなかった単語や表現を 1 日最低 1 つ覚える
- ・積極的にコミュニケーションをとる

そして、終了後には、各自の目標の達成に関するレポートを提出します。

今年のタンデム学習は、4 人ずつのグループ（留学生 1 名と本学学生 3 名）にわかれ、5 日間、以下の活動を行いました。

授業計画

1 日目 自己紹介、プログラムの説明、日本の生活の説明

2 日目 講演、本の紹介、日本語の紹介、プレゼン準備（発表内容の決定）

3 日目 講演、プレゼン準備（ポスター作成、伝統芸能練習）

4 日目 学外研修（小学校での文化紹介）

5 日目 学外研修（神大植物園、深大寺、東京江戸たてもの園）

タンデム学習（１）：お互いの国の作家が書いたお勧めの本を持ち寄って、どんな内容のお本で、なぜお勧めなのかを紹介しあいました。



グループで本を紹介しあう様子



留学生が紹介した本の例

学生の声：

日本人の学生は私を含めて、持ち寄ったものは一般的なフィクション小説といったものであった。一方、留学生が紹介したいと持ってきた本は、『卒業証書をおいて、空をみあげる』というタイトルの短編集で、カンボジアの子どもたちの教育の現状を描いたノンフィクション小説である。その小説について語るときの熱意、真剣さには、大変圧倒された。

タンデム学習（２）：このプログラムのために本学カンボジア語専攻の学生が作った、「カンボジア語で学ぶ日本語教材」を用いて、日本語のしくみを紹介する。



日本語の文字を書いている

タンデム学習（３）：中央区立月島第二小学校の国際教室で行う体験型ワークショップのために、カンボジアの文化を紹介するポスターを作成し、小学生に教えられるように、踊りや歌、伝統芸能を練習する。

学生の声：

小学校ではカンボジア語で名前を書いたらうときに、ある男の子に「名字も書いて欲しい」といわれました。私が「ソム・ソーセイ」って言ってごらん、とその子に言うと、無事に通じたようで、その男の子が「すごい、通じた！」と言ってとても喜んでくれたのがとても印象に残りました。それを見て私も少ない言葉でも伝わるというのはやはり嬉しいし、もっと勉強してたくさん話せるようになりたいと強く感じました。



小学校で教える歌と踊りの練習



伝統芸能の大型影絵のステップの練習

タンデム学習（４）：引率として同行したワ・サオピア国文学部教授の講演会「カンボジアの国文学の現状」、「母語と外国語学習について」に参加し質問をする。



サオピア先生の講演もグループにわかれて聴講

タンデム学習（５）：本学の留学生日本語センターで編纂された教科書『留学生のための日本史』を使って日本の地理と歴史を学んだ留学生が、校外研修で知識を確認する補助を行う。



日本史の講義を聞く



地図で日本の地理を確認



神代植物公園を訪問

学生の声：

学ぶことに対する意欲や何事にも積極的に取り組む姿勢は日本人が見習うべきものだと思った。留学生から植物園にいるときに鳥の名前までも聞かれたり、私はそんなこと気にしたこともなかったというようなことをたくさん聞かれて、答えられない自分を情けなく思うと同時に、こんな熱心な人間になりたいと考えた。

本学学生のレポートから、以下に抜粋を挙げます。また、2年生（初参加）、3年生（2回目の参加）、4年生（3回目の参加）それぞれの観点からのエッセイを全文掲載します。

<成長を感じた：会話>

・実感として去年より聞く力というものが上がったように感じられた。担当のソピア君だけでなくほかの留学生の話すこともある程度は掴むことができた。理由としては、ソピア君と話せるという自信が作用してほかの方のいうことにも耳へ殻をかぶせずに向き合えたような感覚を持つことができたからかもしれない。

・3日目や4日目になると、なんとか会話が成立することが増えました。5日間で飛躍的に獲得語彙が増えスラスラと喋れるようになったという訳ではなくて、自分の言いたいことをなるべく簡潔な今の自分のカンボジア語力に合った形で表現できるようになったと感じたからです。

・カンボジア語での会話で、聞き取れなくて内容が理解できない状況がとても苦手でした。しかし、今回の集中講義で少人数のグループでたくさん会話をしているうちに、「それはどういう意味？」「これはカンボジア語でなんて言うんだっけ？」とカンボジア語で自然に聞けるようになりました。もちろん語彙力を増やすことが重要ではありますが、分からなかったら聞いたり調べたりして理解すればいいのだというラフな気持ちで会話を楽しめるようになりました。

<成長を感じた：語彙>

・「会話中に表現できなかった/辞書で調べた/他の学生に聞いた言葉をまとめて語彙表を作る」結果として約30単語からなる語彙表ができたが、口語表現や植物・食べ物の名前がほとんどであった。以前より認識していた通り、座学の授業でよく使う文語での表現・語彙に強い代わりに日常での会話や生活でよく使うそれに弱いという、自分の特徴がよく分かった。自分のカンボジア語力を客観視するということで達成できたと思う。

・聞き取れなかった言葉をそのままにせずちゃんと聞き返したり、書いてもらったりして語彙力強化に努めるという目標は達成できた。留学生が面倒くさがらず積極的に書いてくれた為、非常に勉強になった。

<先輩から刺激を受けた>

・グループには2年生と3年生の先輩がいた。留学生の言葉を1回で聞き取っていたり、自分が伝えようとしていることを伝えられていたりしていた。また、留学生と積極的に会話をしていた。そのような先輩の姿を見て、私も早くカンボジア人と上手にコミュニケーションをとれるようになりたいと感じた。そのためにこれからのカンボジア語の習得を頑張ろうと思った。

<留学生から刺激を受けた>

・グループのカンボジア人留学生は、何事にも興味があり、日本のことについて絶えず質問をされた。「ホームビジットのとき、どんなあいさつをしたらよいか」「日本人に対して聞いてはいけない質問はあるか」など、普段私たちが気にも留めない無意識に行うようなことを改めて考えるのは新鮮な体験であった。カンボジアの文化を知っている日本人として、そのような説明をするのが義務だと思い、その責任を果たした。

・今回、カンボジア人学生と交流したり、彼らのプレゼンを聞いたりして、彼らの自ら発信しようとする力に非常に驚きました。今後、このような機会があった時にはもう少し自分から何かを発信できるようになりたいです。

・今まではカンボジアに行ったらアンコールワットを見たいなどと観光することばかり考えていたが、今はカンボジアに行ったらカンボジアの学校生活を体験して日本との教育の違いを実際に感じ、互いの良さを理解したり、カンボジア人の熱心さやフレンドリーで素敵な性格がうまれる理由を現地で探してみたい。カンボジアのことをもっと学びたい、現地に行って実際に感じてみたいと思うようになったことが私がこの五日間で得た何よりも大きな収穫である。

-タンDEM学習におけるグループワーク課題 (本の紹介 1) in Khmer : 『ころ』 (夏目漱石)

本の紹介 『ころ』 (夏目漱石)

青井拓斗 AOI Takuto

អ្នកនិពន្ធសៀវភៅនេះគឺ លោកណាគ្យីមេ សូសេគី ជាមនុស្សជំនួញឈ្មោះម្នាក់នៅប្រទេសជប៉ុន។ គាត់កើតនៅឆ្នាំ ១៨៦៧ ហើយទទួលអនិច្ចកម្មនៅឆ្នាំ ១៩១៦។ គាត់ជាសាស្ត្រាចារ្យនៅសាកលវិទ្យាល័យតូក្យូ និងសរសេរស្នាដៃរឿងជាច្រើន ដូចជាកុក្ក្រូ, ខ្ញុំជាឆ្មា, បុត្រចាន់ជាដើម។ ជនជាតិជប៉ុនអ្នកណាក៏ធ្លាប់អានរឿងនេះដែរ ពីព្រោះមាននៅក្នុងកម្មវិធីសិក្សាថ្នាក់អនុវិទ្យាល័យ។

ខ្ញុំចូលចិត្តរឿងកុក្ក្រូ ដែលលោកសូសេគីសរសេរនៅឆ្នាំ ១៩១៤។ ខ្ញុំចង់ណែនាំអោយអ្នកទាំងអស់គ្នាអានរឿងនេះ។ ចំណងជើង កុក្ក្រូ មានន័យថាចិត្ត ហើយសាច់រឿងនេះនិយាយពីចរិយានិងស្នេហា។ រឿងនេះមាន៣វគ្គ។ វគ្គទី១មានចំណងជើងថា "លោកគ្រូនិងខ្ញុំ" សាច់រឿងរៀបចំ ចាប់ពីខ្ញុំទៅកំសាន្តសមុទ្រហើយបានជួបប្រុសម្នាក់ ខ្ញុំចាប់អារម្មណ៍ចំពោះប្រុសនេះ ហើយខ្ញុំសរសើរចំពោះជីវិតរបស់គាត់ហើយគួរតែហៅគាត់ថាលោកគ្រូ។ ប៉ុន្តែលោកគ្រូនោះអត់ធ្វើការទេ ហើយក្រៀមក្រំខ្លាំងណាស់។ ខ្ញុំចង់ដឹងពីមូលហេតុដែលលោកគ្រូទៅជាយ៉ាងនេះ។ ប៉ុន្តែលោកគ្រូគ្រាន់តែនិយាយថា "មនុស្សទាំងអស់គ្នាជាមនុស្សល្អ ប៉ុន្តែស្រាប់តែក្លាយទៅជាមនុស្សអាក្រក់"។

វគ្គទី២មានចំណងជើងថា "ឪពុកនិងខ្ញុំ" វគ្គនេះសរសេររៀបរាប់អំពីការស្លាប់របស់ឪពុកខ្ញុំ ពេលដែលខ្ញុំជួបលោកគ្រូ ឪពុកខ្ញុំមានជំងឺធ្ងន់ ដូច្នេះម្តាយហៅខ្ញុំអោយទៅស្រុកថែទាំឪពុក បើជំងឺឪពុកធ្ងន់ឡើយហើយខ្ញុំអាចត្រឡប់ទៅតូក្យូបាន។ ប៉ុន្តែជំងឺនេះកាន់តែដុះដាល ខ្លាំងឡើងៗ។ ពេលនោះ ខ្ញុំទទួលសំបុត្រពីលោកគ្រូ។ លោកគ្រូ សរសេរថាគាត់ចង់ជួបខ្ញុំដោយគាត់មានរឿងចង់និយាយជាមួយខ្ញុំ។ ប៉ុន្តែខ្ញុំទៅមិនកើតដោយសារជំងឺឪពុកខ្ញុំ ដូច្នេះខ្ញុំសរសេរសំបុត្រតបទៅលោកគ្រូថា ខ្ញុំទៅអត់បានទេ។ ក្រោយមក លោកគ្រូសរសេរមកវិញថាមិនអីទេ។ ២,៣ថ្ងៃក្រោយ ជម្ងឺឪពុកខ្ញុំកាន់តែដុះដាលទៅៗ។ ពេលនោះ ខ្ញុំបានទទួលសំបុត្រពីលោកគ្រូម្តង

ទៀត សំបុត្រនេះក្រាស់ឃ្លឹក លោកគ្រូសរសេរថា "ពេលបួនអានសំបុត្រនេះ លោកគ្រូអត់នៅក្នុងលោកនេះ ទៀតទេ"។

វគ្គចុងក្រោយមានចំណងជើងថា "បណ្តាំរបស់លោកគ្រូនិងខ្ញុំ" បណ្តាំនេះមានសរសេររៀបរាប់ពី អតីតកាលរបស់លោកគ្រូកាលគាត់នៅរៀន។ លោកគ្រូមានមិត្តភក្តិម្នាក់ ឈ្មោះ«យេ(K)»។ «យេ(K)»ជាមនុស្ស តឹងរ៉ឹងជាក់ខ្លួនឯង ដូចជាលោកសង្ឃ ឧទាហរណ៍គាត់គិតថាស្នេហាគឺជាឧបសគ្គ រារាំងការរៀនសូត្រ។ «យេ (K)»និងលោកគ្រូរស់នៅផ្ទះជួលមួយ។ នៅផ្ទះនោះមានម្ចាស់ផ្ទះនិងកូនស្រីគាត់ដែលរស់នៅជាន់ខាងក្រោម។ លោកគ្រូបានលួចស្រលាញ់នាងនោះ តែលោកគ្រូមិនប្រាប់«យេ(K)»ទេ។ ថ្ងៃមួយ«យេ(K)»និយាយប្រាប់ទៅ លោកគ្រូថា«យេ(K)»ស្រលាញ់នាងនោះ។ លោកគ្រូភ្ញាក់ជាខ្លាំង តែអត់ប្រាប់ថាលោកគ្រូក៏ស្រលាញ់នាងនោះ ដែរទេ។ ថ្ងៃក្រោយលោកគ្រូសម្រេចចិត្តថាចូលស្តីដណ្តឹងនាងនោះ ម្តាយរបស់នាងយល់ព្រមអោយ។ ២-៣ថ្ងៃ ក្រោយមក «យេ(K)»បានសម្លាប់ខ្លួន ។

ខ្ញុំចាប់អារម្មណ៍អំពីមូលហេតុដែល«យេ(K)»សម្លាប់ខ្លួន។ វាមិនមែនការខូចចិត្តទេ។ ការពិតគាត់ ស្រឡាញ់នាងនោះ ក្បត់គំនិតរបស់គាត់ពីមុន។ ដូច្នេះហើយគាត់សម្លាប់ខ្លួន។ រឿងនេះសរសេរកាលពី១០០ ឆ្នាំមុន ខ្ញុំចាប់អារម្មណ៍ពីគំនិតនិងការរស់នៅពេលនោះ។ តួអង្គក្នុងរឿងជានិស្សិតហើយខ្ញុំក៏ជានិស្សិតដែរ។ ខ្ញុំ យល់ថា កាលពី១០០ឆ្នាំមុន ការរស់នៅរបស់និស្សិតក៏មិនសូវខុសគ្នាពីយើងឥឡូវដែរ។

-タンDEM学習におけるグループワーク課題 (本の紹介 2) in Khmer : 『古都』 (川端康成)

本の紹介 『古都』 (川端康成)

横田 志保 YOKOTA Shiho

ចំណងជើងសៀវភៅដែលខ្ញុំចង់ណែនាំឲ្យស្គាល់គឺ កូតូ។ អ្នកនិពន្ធសៀវភៅនេះឈ្មោះ លោកកាវ៉ាបាតា យ៉ាស៊ីណារី។ ពាក្យ កូតូ ក្នុងរឿងនេះ មានន័យថា រាជធានីចាស់ ហើយជាទីក្រុងក្បួនសព្វថ្ងៃ។ យើងនៅទីក្រុងតូក្យូ ដែលជារាជធានីរបស់ប្រទេសជប៉ុនសព្វថ្ងៃនេះ តែពេលមុន កូតូជារាជធានីរបស់ប្រទេសជប៉ុនពីមុនមក។ អញ្ជឹងបានជានៅកូតូ មានសំណង់និងវត្ថុចាស់ៗ ដែលគេជួសជុលហើយថែទាំ។ នៅកូតូ ក៏មានបេតិកភណ្ឌពិភពលោកផងដែរ។

ក្នុងរឿងនេះ មានក្មេងស្រីពីរនាក់ ដែលជាកូនក្មោះតែម្នាក់ៗធំឡើងនៅផ្ទះផ្សេងគ្នា ថ្ងៃមួយពួកគេជួបគ្នានៅកូតូ។ មុនដំបូង ពួកគេភ័យបន្តិច តែបន្តិចក្រោយមក ពួកគេកាន់តែជិតស្និទ្ធនិងគ្នាបន្តិចម្តងៗ។ ខ្ញុំមានមូលហេតុបី ដែលចង់ណែនាំឲ្យអានសៀវភៅនេះ។

មូលហេតុទីមួយ អ្នកនិពន្ធនេះ ល្បីណាស់ ទាំងនៅក្នុងជប៉ុន និងនៅលើពិភពលោក។ ពីព្រោះគាត់បានទទួលរង្វាន់ណូបែលផ្នែកអក្សរសិល្ប៍នៅឆ្នាំ១៩៦៨។ គាត់ជាជនជាតិជប៉ុនដំបូងគេ ដែលបានឈ្នះពានរង្វាន់ណូបែល។

មូលហេតុទីពីរ ឃ្លាក្នុងប្រលោមលោកនេះល្អណាស់។ ជនជាតិជប៉ុនប្រៀបធៀបឃ្លាល្អថាដូចជាទឹកហូរ។ ខ្ញុំគិតថា ឃ្លាល្អជាឃ្លាងាយយល់ ហើយហូរចូលក្នុងអារម្មណ៍អ្នកអាន។

ខ្ញុំគិតថា ឃ្លាដែលលោកកាវ៉ាបាតា យ៉ាស៊ីណារីសរសេរ ជាឃ្លាល្អ ហើយមានមនុស្សច្រើនគិតដូចខ្ញុំ។

មូលហេតុទីបី យើងអានសៀវភៅនេះ យើងអាចស្គាល់ពីកូតូបាន។ គាត់សរសេរពីទេសភាពនិងបុណ្យផ្សេងៗ ដែលគេប្រារព្ធធ្វើនៅកូតូ។ ក្នុងរឿងនេះ តួឯករស់នៅកូតូ។ ឯជនជាតិបរទេសក៏ចូលចិត្តកូតូដែរ។ ជនជាតិជប៉ុនដែលចូលចិត្តកូតូក៏មានច្រើនដែរ។ មានអ្នកទេសចរណ៍ជាច្រើនទៅកូតូគ្រប់រដូវ។ នៅកូតូ មានបុរាណដ្ឋានច្រើនដែលយើងអាចឃើញពីវប្បធម៌ ប្រពៃណីរបស់ជប៉ុន។ ខ្ញុំធ្លាប់ទៅទីនោះពេលខ្ញុំនៅក្មេង ខ្ញុំមានអនុស្សាវរីយ៍ល្អ ហើយខ្ញុំតែងតែចង់ទៅទីនោះ។ ប៉ុន្តែកូតូនៅឆ្ងាយពីទីនេះ។ នៅពេលលោកអ្នកអានសៀវភៅនេះ លោកអ្នកអាចស្គាល់ពីកូតូ។ បើជនបរទេសអានរឿងនេះ ពិបាកយល់បន្តិច តែក៏មានសៀវភៅដែលគេបកប្រែជាភាសាអង់គ្លេសដែរ។ បើលោកអ្នកអាចអានសៀវភៅនេះ ទាំងពីរភាសា ជាភាសាអង់គ្លេសផង និងជាភាសាជប៉ុនផង លោកអ្នកប្រហែលជាងាយយល់ និងអាចរៀនភាសាជប៉ុនបានផងដែរ។

-タンデム学習の成果 1：ピッチング練習からキャッチボールへ

田村 玄（国際社会学部 2 年）

やっぱり取るべきじゃなかった。私は開始 1 時間でそう確信した。なんやかんやで何とかなるだろうなんて思って 2 か月前に履修登録をした自分を恨んだ。そう思ったのはプログラムが開始してからすぐの自己紹介タイムに入った時だった。

私の班は 3 年の先輩と 1 年の後輩、そして国文学科のサメット君を含めた 4 人班だった。先輩は去年も参加したせいか、自分には期待するなと言う口

ぶりの割に何となく余裕がありそうだった。私も、曲がりなりにも 1 年間カンボジア語を勉強してきたのだから何とかなるだろうと思っていた。しかしいざプログラムが始まってみると、自己紹介から躓いた。いや、ずっこけた。まず名前が聞き取れなかった。ローマ字やカタカナ的には Samet/サメットだったのだが、実際にはサメットだった。そこで 3 回くらい発音指導が入った。4 回目でようやく妥協点がもらえた。

そのあと色々と自己紹介をするのだが、いかんせん話が續かない。話に膨らみが生まれなかったのだ。会話は気持ちのキャッチボールだというが、それならあの自己紹介はキャッチボールではなくピッチング練習だった。互いに緊張していたせいもあってか、なかなか会話が派生しなかった。他の班が和気あいあいとしやべる中で私たちの班には微妙な空気が流れ、私は 5 日間やり遂げられるか不安にさいなまれた。

しかし何より一番の原因は自分の語彙力不足だった。一度は教科書で見た基礎的な単語にも関わらず、いざ話す場面になるとその単語が出てこない、発音が分からないといったことが 5 日間全体を通して多々あった。訊きたいことがあっても訊けない悔しさ、歯がゆさ、情けなさ、これがこのプログラムで得た一つ目の収穫である。

とはいっても一番会話に苦労したのは話題のきっかけが何もないこの時間だったので、その後は様々な話題があったのでそ



小学校でのプレゼン用のポスターを完成させて（筆者左端）

ここまで気まずい空気にはならなかった。サマエット君も「どんどん挑戦しなよ」と言ってくれたので、私も不安はありながらも会話をするように心がけ、また彼の言っていることから聞き取れた単語の断片を必死につなぎ合わせて理解に努めた。彼自身も積極的にコミュニケーションを取ろうと頑張ってくれたし、何より私の発音も文法も滅茶苦茶なカンボジア語を理解してくれようとしていた。その点に関しては本当に感謝しかない。彼のあの優しさが無ければ私は途中で折れていただろう。少しずつ会話がキャッチボールになっていくように感じた。収穫の二つ目は、会話は互いを理解しようと努力する肉体作業だということである。そして、意味が分かった時の嬉しさは代えがたいものであった。

もう一つの収穫は、ボディランゲージはあまり役に立たないということだ。これは人によって意見が分かれるかもしれないが、少なくとも私はそう感じた。よく海外旅行者が「言葉が通じなくても身振りで何とかなるよ」と言うが、それは本当に、生きていけるという意味での「何とか」レベルだろう。私もプログラム中わからない単語があったら身振りで説明しようとしたが、それすらできない単語が世の中には沢山ある。「博物館」なんて単語をどう身振りで説明しようというのか。やっぱり言葉は必要不可欠であり、偉大なものだということを思い知った。

以上が今回のプログラムを通じて私が得たものである。プログラム中はネガティブなことを感じたことが多かったが、改めて振り返ると大きな収穫だった。というのも、会話ができないことを悔しいと思ったのは、まだ自分の中に意見を伝えたいという渴望があるからである。それが分かっただけでもこれからの外国語学習に生かせるのではないか。またいつかサマエット君に会えた時に少しでも長く会話が続けられることを目標にこれから勉強していく所存である。

-タンデム学習の成果 2：その人を知ろうとすること

秋山慶多（言語文化学部 3 年）

今年のショートステイは体力的な面ではさておき、去年とは比べ物にならないほど密度が濃く、なおかつ自分の成長につながるものであり、そしてハードなものとなった。今回の SS は夏学期の開催ということで去年の外語祭で体調を崩しながらも乗り切った前回



サオピア先生と小学校で文化紹介

と比べれば楽勝ではないかと高を括っていたのだが、その期待はあっという間に崩れ去った。先生から来たグループ分けのメールが私を絶望の淵へ叩き込んでくださったのだ。

というもてっきり私は去年の記憶から今年も上級生、下級生がグループにバランスよく分けられ、それぞれグループごとに英語の流暢な留学生たちと先輩の偉大なカンボジア語力に多分に頼りながら、何だったらちょっと英語も使いながら、わちゃわちゃと交流を図るものかと思いきや、私のグループには上級生はおらず、それはおろか下級生、同期もいなかったのである。私のグループは私と王立ブノンペン大学の国文科の教授であるサオピア先生のみで構成されていた。終わったと思った。なぜなら去年は私が単独でカンボジア語を使って円滑なコミュニケーションを図ることはできなかったからである。なんなら留年の危機を経験している。先生が学生それぞれが紹介する本をもとにグループ決めをしておっしゃっていたので、自分もカッコつけて、純文学ではなくアイドルの自伝本とかを紹介しておけばよかったと後悔の念があふれた。

そして当日対面したサオピア先生は面倒見のいい、おおらかでお話し好きの女性で、初めてあいさつした瞬間から私のカンボジア語力を見抜き、話し方をやさしくしてくれたり、単語を説明してくれたり、時には文字に起こして、必死に伝えようとしてくれた。

ここで本来アテンドされる側である、先生がここまで一生懸命に、コミュニケーションを取ろうとする姿勢に感謝すると同時に情けない自分にも気づいた。そこで私はこの先生の誠意に誠意でこたえようと思った。たと言っていることが通じなくても、

伝えようとしなないことは非常に不誠実なことである。ましてや不慣れなところにいる人に対してそのような態度は言うまでもなくよくないことである。とりあえず何でもいいからお話をしようと思った。次の日、まずサオピア先生のお気に入りの本から少しでも疑問に思ったこと前もって準備しておいた単語を用いて聞いてみた。サオピア先生は楽しそうにそれについてやはり丁寧に答えてくださった。わからない単語はきちんと説明していただき、納得するまでお話を聞いた。そんなことは言語以前の話なのであるが、自分にはそれができていなかったとこのショートステイを通じてようやく気付いた。

言語はあくまで人とつながりあうための一つの手段であり、まずその人を知ろうとすることがコミュニケーションの根底にある。自分がその言語に通じていなくとも、他人と仲良くなるために、できること、やるべきことがあるということを身をもって体感できたのがこの夏の交流を通して得た成果である。



本の紹介

-タンデム学習の成果 3：学ぶ機会を大切に

阿部航平（言語文化学部 4 年）

今回で 3 回目となった集中講義は、自分が参加した中で最も有意義なものになったと感じる。自分のカンボジア語力を懸念して少々コミュニケーションをためらうことが過去にあったが、今年は 4 年生としての参加ということで、なるべく会話をする時間を増やしていくことに務めた。担当していた留学生や他のカンボジアの学生と協力することで、カンボジア語での会話はもちろん、グループワークのスムーズな進行に自信を持つことができたと感じる。5 日間の集中講義の中での当初の目的は、以下の 3 つであった。

- ・担当の留学生の一日の流れを知る
- ・家族構成を知る
- ・学習の中で感じてきた『発音』に関して、訂正してもらうこと

担当した留学生はサロンという名前で、年の離れた兄弟がいる。何事に関しても熱心に知りたがっていたのが印象的で、カンボジアでの教育問題を改善するために教師になりたいと言っていた。サロンとのコミュニケーションの際、どうしても伝えたいことが伝わらない時には、英語を使い、本来伝えなかった内容に相当する単語をカンボジア語で教えてもらう方法で会話をしていた。そのような方法で会話をしていくことによって、よりスムーズなコミュニケーションが取れたと思う。彼の常に学ぶ姿勢や、自分の知識を周りや世の中に還元していこうとする考えに触れることで、自分もそのような考えを持とうと感じた。学食のサーモン丼や深大寺のそばなど、彼にとって初めて食べるものに積極的に挑戦していたことが特に印象的だった。

去年に引き続き、プログラムの過程で小学校では小学生にカンボジアのことを紹介した。小学校で私は 5 年生に歌と踊りを教える際の司会を担当



グループワーク（筆者右端）

した。多少の不安もあったが、カンボジアの人たちの紹介もスムーズに行うことができたと思う。歌と踊りを少ない時間の中

で小学生たちに教えるのは難しかったが、サロンが楽しそうに教えていて、小学生たちも彼のことを慕っていたので満足のいくものとなった。日本の建物を紹介している小金井の江戸東京たても園に行った際に、彼の具体的な日々の過ごし方について聞いた。放課後、彼は趣味の読書や詩を書くことが多く、wifiのあるカフェで動画を見ることが多いと言っていた。カンボジア人の多くが利用しているフェイスブックは、彼は時間が取られるから頻繁には利用していないと言っており、彼の生活を少し知ることができた。その帰りのバスの中での会話で、度々「魚」と「価格」の発音を混同してしまい、うまく伝えることができなかった。似たような発音で意思疎通が難しいと伝えると、カンボジアでよく使われる挨拶や、「食べる」の種類などを教えてもらった。

今回の講義を通して、毎年のようにカンボジアからの留学生の学ぶ姿勢に影響を受け、自分も学ぶことの機会を大切にしていきたいと感じた。将来的に再び日本に来たいとサロンは言っていたので、今回の目的は達成できたと感じた。

-短期留学経験の活用報告：月島第二小学校に関する発表

チュク・ソピア（王立ブノンペン大学大学院）



月島第二小学校を訪問できて、とても幸せでした。これまでドラマでしか見たことのなかった日本の小学校を見学し、カンボジアの文化、踊りや影絵も子どもたちに紹介できたのです。人生初の体験でした。小学校では、日本の子どもの学び方と、先生方の教え方を観察し、いろいろ質問しました。

帰国後、幸運にもカンボジアの小学校（Footprints International School）の先生方に向けて、日本の小学校での経験を発表する機会をいただきました。1年生から3年生の担任の先生向けと、4年生から6年生の担任の先生向けの2回に分けて行い、各回40分の発表の後に、20分から30分の議論をしました。

まず、日本の文部科学省の援助を受けた今回の短期交換留学プログラム（大学の世界展開力強化事業「日本発信力強化に貢献するミャンマー・ラオス・カンボジア知日人材養成プログラム」の短期 Joint Education Program）について、

また、王立ブノンペン大学と東京外国語大学との交流について紹介しました。日本の小学校訪問はたった一日であったため、日本の子どもの学習についてすべてを知ることはできませんでした。しかし、先生方や日本の友だちに質問して、詳細な情報を得ることができたため、2020 年のオリンピック・パラリンピックに向けての中央区版「一校一国運動」の基本施策についても紹介しました。

第一に、日本の子どもの礼儀作法について、先生方やお客さんにきちんと挨拶すること、ありがとうや、ごめんなさいをよく口にすることを話しました。カンボジアでは、ありがとうやごめんなさいをあまり言わないのです。校舎に足を踏み入れると、まず靴を置くための棚が目に入りました。子どもたちは、校舎に入る時、家から履いてきた靴を脱ぎ、上履きに履き替えます。校舎の環境は、スペースに余裕があり、木が植えてあり、風通しもよく、教室にも出入口が 2 か所と窓がたくさんあって、風も光も入ってきます。

多くの小学校では 8 時半に登校し、3 時半か 4 時頃に下校します。廊下には子どもたちの作品が掲示されており、教室に入ってみると、まさに勉強したくなるような場所でした。ランドセルは机の中や下には置けず、教室の後ろの方に置く場所がありました。こうすることで、席を移ったり、授業中に活動するのが楽になるのだと気がつきました。後ろの壁には子どもたちの作品と学習した漢字が掲示されており、教室を飾ると同時に、習った漢字を思い出すこともできます。

教室はとてもきれいです。こうやって小学校から教室を掃除するよう教えているなら、日本を旅行してゴミが舞うのを目にしないのも不思議ではありません。子どもたちは自らの手で拭き掃除をしていました。トイレもきれいで、臭くありません。昼時には、クラスメイトの給食を用意する係が 2、3 人います。教室は臭くならないのでしょうか？いいえ。換気ができているし、食事も匂いがきつくないからです。

私たちカンボジア人留学生が発表をしている時、子どもたちは一生懸命聞いて、メモを取り、話し終わると、質問するために手を挙げました。注意深く話を聞き、メモし、終わったら質問する、ということができるようです。子どもたちには、ただ単に学習内容を書きとらせるよりも、発表などアウトプットをさせています。先生は親しみやすく友だちのようで、子どもたちは先生のことを怖がりすぎないので、学習内容についても質問しやすいのです。

休み時間には、校庭など教室の外に遊びに行かれますが、これは良い点です。一日中教室の中において、休み時間も教室の中にいたらストレスがたまります。外に遊びに行くことで気分転換できます。一方、試験に関しては、合否を判定するのではなく、初等教育の段階では子どもたちの達成度を測るだけです。

最後に、私たちカンボジア人留学生がスバエクトム（カンボジアの大型影絵芝居）を紹介した時のことですが、子どもたちは、ただ単に見るだけでなく、影絵人形を持ったり、触ったり、匂いを嗅いだりもしました。このように、日本の小学生は、詳細な観察によって学ぶのです。

また、日本滞在中の移動途中で、小学生が籠を持って集団で歩いているのを見かけて、校外学習をしているのだとわかりました。教室で学んだことをさらによく理解するために、学校の外でも学ぶのです。私は、かつて日本に留学していた1年間に、動物園に行ったことがあります。グループに分かれた子どもたちが座って動物の動きを観察し、描いているのを見ました。これは日本の教育の典型的な学習の一つです。



以上のような発表の後、Footprints International School の先生方全員で日本の小学校の良い点について議論しました。靴を脱ぐこと、敬意を示す態度、子どもたちの作品の展示などは、すでに実践している点です。一方、努力を継続すべき点としては、先生と生徒の距離を近くすること、子どもたちに要点をメモするノートを持たせること、休憩時間に外に出て遊ぶことがあり、さらに、学習内容を強制的に書き取らせるべきかという問題があります。しかし、最後の点、学習内容の書き取りについては、昔から現在までずっと変わらず続いていることです。カンボジアでは、生徒 2 人で教科書 1 冊を共用するため、学習内容を書き留めることで、家庭学習ができるようになるのです。上記の点に加え、授業での学習内容を深めるための校外学習の計画については、さらに奨励し、改善していくことになりました。

（原文：カンボジア語 日本語訳：菊間、井上）

⑤カンボジア語で学ぶ日本史

言語文化学部カンボジア語4年 菊間友梨子

日本史の教材を活用した、地域言語A（カンボジア語）の授業について紹介します。



・授業内容

この授業では、教材である『留學生のための日本史』（東京外国語大学留學生教育教材開発センター）の本文をカンボジア語に訳しています。履修學生は、まず予習として指定された範囲をノートに訳してきます。授業では、順番に一人一文ずつ予習してきた訳を発表し、間違っている所や不自然な所を母語話者の先生が指摘し訂正します。先生が用意した模範の訳はあるものの、それが唯一無二の答えではなく、學生の訳に合わせて調整します。日本語特有の語彙や表現など、カンボジア語に訳すのが難しいものや重要なポイントについては、學生全員がそれぞれの訳を発表することもあり、語彙や表現のニュアンス、そして日本語の解釈について議論します。

・履修學生の感想

授業の中でまず最初に躓いたのは語彙の壁である。「大名」「幕府」など、日本の歴史特有の語彙が多く、カンボジア語の対訳を探すのに手間取った。「大名」も「幕府」もカンボジアの歴史には存在しないため、つついそのまま、daimyou、

bakuhu と怠けた訳し方をしてしまう。しかしそれでは意味が伝わらず訳として不十分であるため、近い意味を持つカンボジア語を探す必要がある。例えば、「大名」は「スダイチ・トラニユ（かつてカンボジア内の小国を治めていた各国主）」、「幕府」は「ロアタピパール（政府）」と訳す。また対訳だけでは不完全・不十分の場合は、カッコ書きで説明を加えることもある。ただこのようなカンボジア語の語彙はそうそう頭に浮かぶものではなく、たいていの場合その部分だけ空欄のまま授業に臨むことが多かった。

表現についてはそれほど難しいものはなかった。なぜならこの教材自体、留学生向けに作られたものであるため、単純明快な構造で非常に訳しやすい文章だった。

その次に直面したのは、解釈の壁である。先生と学生の間で、あるいは学生同士の間でも日本語の文章の解釈が異なる場合がある。学生はすでに学校等で日本史を学んでいるため、それぞれの知識と解釈を持っている。この『留学生のための日本史』はあくまで概略的な内容のため、無意識のうちに自分の知識をつけ足して訳に反映させていたり、一つの訳に対して異なる解釈を持っている場合がある。その場合、どの解釈が適当でどうカンボジア語に訳すか、しばしば白熱した議論が展開される。しかしその解釈の微妙なニュアンスをカンボジア語で伝えることは至難の業で、先生の神業的な“日本人が話すカンボジア語”の理解力のもとギリギリ成り立っているようなものである。それでも懸命に自分の中の語彙を駆使してカンボジア語で伝えようとするには大きな意味があるように思う。

・授業担当のマロム先生のコメント（原文：カンボジア語）

学生が訳してきた文章は、主語や動詞などがはっきりしていないものが多い。どこまでが主語でどれが動詞なのか、明確にしたうえで訳すことが大切。また、日本語の文章には主語がないものが多いが、カンボジア語では主語はなるべくあった方がよいとされる。そのため適宜主語を付け足す必要がある。

語彙に関しては、漢字ごとに訳するのがポイントである。例えば「王政復古」の場合、「復活すること＋政治＋王＋昔の」といった具合に訳す。漢字の熟語を前にするとどうしても難しいというイメージが湧きがちだが、上のように一文字ずつ意味をとらえて訳していけばそう難しくはない。

（2018 年 11 月記）

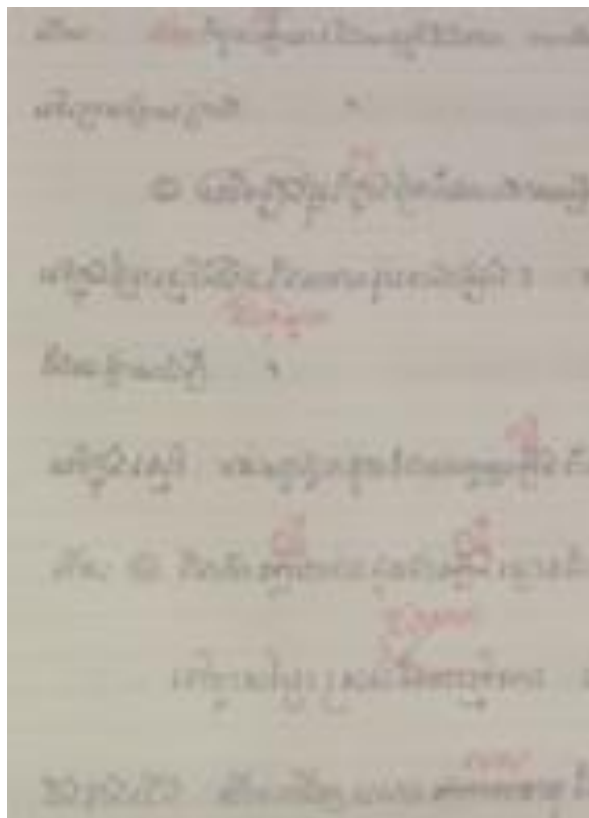
⑥カンボジア語で紹介する日本文学

言語文化学部カンボジア語 4 年 菊間友梨子

日本文学の一部を試訳する、地域言語 A（カンボジア語）の授業について紹介します。

・授業内容

毎学期、様々な日本の文学作品の一部をカンボジア語に試訳する。学生は毎週指定された範囲をカンボジアに訳し授業に臨む。授業ではまず学生が訳を発表し、先生が教室のホワイトボードにその訳を板書する。そして書き終わったら学生の訳を訂正していく。しかしこの授業では“十人十色”ならぬ“十人十訳”が先生のポリシーであるため、明らかに間違っているところや意味の通じないところ以外は訂正されず、先生の用意してきた模範解答も、「こういう言い方もあるよ」、「でもこっちでもいいよ」とあくまで参考にとどめる。また授業後にはノートを回収し、先生が一人一人の訳を全て添削するので、たとえほかの学生の訳が自分の訳と異なっている、すべて修正する必要はない。



・履修者としての感想

この授業はカンボジア語の全授業の中で最も難しいという印象を受けた。その要因はおそらく“日本語の曖昧さ”にある。これまでの翻訳の授業は説明文や雑誌の記事など、言わんとしていることが明確だったため、いかにカンボジア語の語彙と文法に当てはめるかということに専念すればよかった。しかし文学作品の場合、ただ文字通りに訳すだけでは作品の世界観はなかなか表現することができない。文章から感じ取るイメージ、日本語の音の美しさ、言葉に掛けられた別の意味、それらをうまく咀嚼してカンボジア語で再構築することは本当に難しい。また学生は日本語からカンボジア語に訳すのに対し先生は英語の本からカンボジア語に訳すため、そもそも元の文章が大きく異なっていることがあり、何が正解か誰にもわからない、先生も直しようがない、という事態にしばしば陥る。

説明文の翻訳の時は一つ一つの言葉や表現に対し説明を加えながら訳していたが、小説の場合、読む時に物語の進行を妨げないようにしなくてはならない。注釈が多すぎる小説が読みにくいと同様、説明調の長い語句やかっこ書きの解説が多いと物語をスムーズに読み進めることができなくなる。だから時に、語彙や表現をあえて訳さないことも翻訳の手法の一つだということを学んだ。しかしそう考えると少し気が楽になった。原文の内容を大きく逸脱しない限りは大丈夫だという安心感から、思い切って訳すことができるようになった。

翻訳の授業を通して、自分の日本語力のなさに愕然とした。日本語はネイティブなのだから、もう一つの言語さえできれば翻訳はできと思っていた。しかし実際は違う。日本語の理解力、教養力、そして忠実に訳すべきかそうでないかを見極める力、これらがないと翻訳はできない。また、もちろんカンボジア語の理解も深めておく必要がある。語彙を増やすことはもちろん、「カンボジア語らしい表現」も知っているととても役に立つ。どのような言い回しや表現が好まれるかは、言語によって異なる。抽象的な表現を好む日本語、直接的な表現を好む英語、ではカンボジア語は？残念ながらそれを明言できるほどまだ私はカンボジア語に精通していない。だからこれからもカンボジア語学習に精進したいと思う。

・授業担当のソバタナ先生のコメント（原文：カンボジア語）

文学作品の翻訳は正直難しいと思う。自分は日本語の原文を読んでいないので、授業中に学生が自分の用意した訳とは全く異なる訳を言ってくる場合もある。また日本の文学作品では、文字に表れていないところで何かを伝えることも多いため、学生同士でも時に解釈が異なる。しかしそのどれもが間違いではなく、一人一人訳し方が異なるのは当たり前である。日本語とカンボジア語では表現の仕方が異なるため、その微妙な差異やニュアンスを完璧に伝えることはできない。だからこそ、学生には柔軟に考えてほしい。言葉の一語一句や文法に縛られるのではなく、何を伝えたいかを大まかにとらえて、カンボジア語に訳す時にはシンプルに考えることが大切である。

（2018 年 12 月記）

⑦2019 年度受入（2019 年 7 月）

-王立プノンペン大学との短期 JEP を開講

2019 年 7 月 19 日（金）～27 日（土）、大学の世界展開力強化事業「日本発信力強化に貢献するミャンマー・ラオス・カンボジア知日人材養成プログラム」の短期 Joint Education Program（共同教育プログラム）で、6 名の王立プノンペン大学（カンボジア）の学生を受け入れました。



開講式での合唱

プログラム全体の開講式の様子は下記をご覧ください。

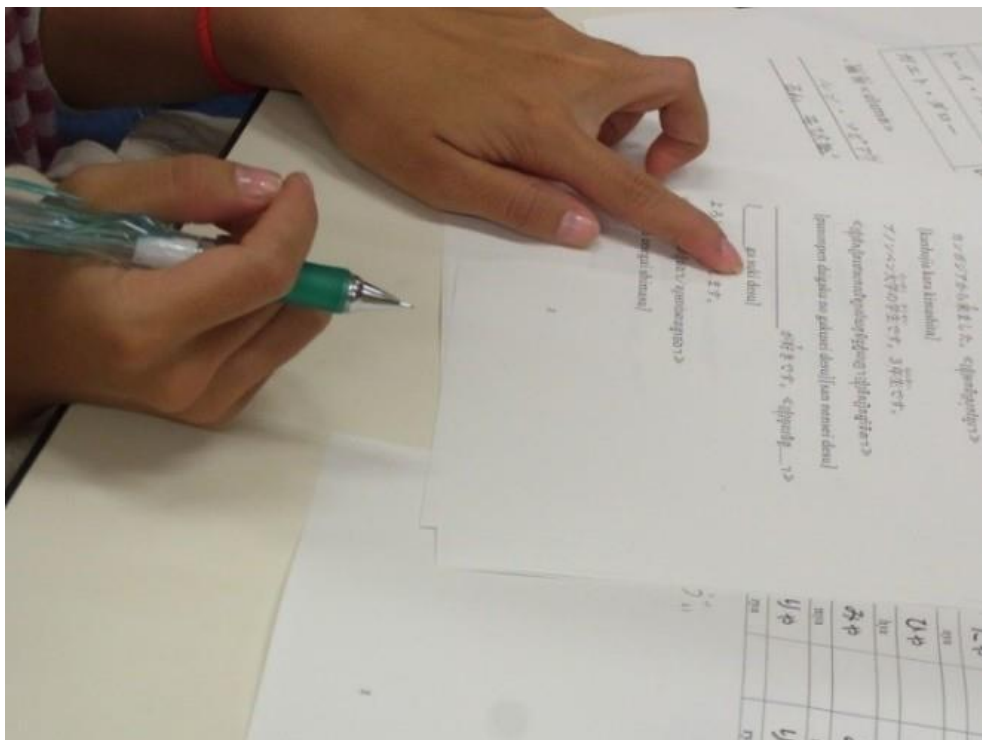
http://www.tufs.ac.jp/NEWS/trend/190724_2.html

このプログラムでは、本学カンボジア語専攻の学生と王立プノンペン大学の学生がともに行うタンデム学習が行われました。タンデム学習は、カンボジア人留学生 1 人を本学学生 3 人が囲むグループ活動として、カンボジア語で行われました。授業として参加した本学の学生 17 名にとっては、これまで学習を重ねてきたカンボジア語の運用能力を実践するよ

い機会になりました。



タンデム学習（１）：ポスターセッション：出身地の紹介



タンデム学習（２）：日本語学習

カンボジア人学生は、本学のパン・ソバタナ客員教授による日本文学紹介の講義を受けました。また、江戸東京博物館と浅草寺を訪問し、歴史を学びました。さらに、茶道、着付け、家庭訪問などの日本文化体験も行いました。



着付け体験



江戸東京博物館見学

学生交流のほか、引率としてガエト・ダロー先生が同行し、外国語学習に関する講演会が行われました。また、「ASEAN+3 学生交流と流動性に関するガイドライン」に基づく単位互換や質の保証について協議し、両大学の協力関係の発展について意見交換をしました。さらに、7月22日（月）には、在日本カンボジア王国大使館を表敬訪問し、学生交流のための査証申請について協議しました。



閉講式にて、林佳世子学長と

短期 JEP の様子は本学 YouTube: TUFS Channel からご覧いただけます。

◆カンボジアからの交換留学生（短期 JEP）のポスター発表「私の故郷」の一部

（カンボジア語、日本語字幕付き）

<https://youtu.be/xPcR1BkgTEo>

-実践報告：王立プノンペン大学との短期 JEP におけるタンデム学習

2019 年 7 月 19 日（金）から 7 月 27 日（土）まで、大学の世界展開力強化事業「日本発信力強化に貢献するミャンマー・ラオス・カンボジア知日人材養成プログラム」の短期 Joint Education Program で、6 名の王立プノンペン大学（カンボジア）の学生を受け入れました。

このプログラムでは、本学カンボジア語専攻の学生と王立プノンペン大学の学生がともに学ぶタンデム学習を行っています。本学の学生は、集中講義（地域言語 A / 専攻言語）として履修します。4 年目となる今年は、1 年生から 4 年生までの 17 名が履修しました（1 年目 17 名、2 年目 16 名、3 年目 19 名が履修）。

6 名の王立プノンペン大学の学生は、日本語学習の経験はありません。授業はすべてカンボジア語で行われました。本学の学生は、留学生たちに「知日人材」への第一歩を踏み出してもらうべく、タンデム学習に参加する前に、以下の準備をしています。

- ・それぞれの語学力にあわせた目標をたてる。
- ・自分の名前と出身地を紹介するポスター発表の準備をする。
- ・校外研修先で説明できるように語彙を用意しておく。

各自が設定した目標の例としては、以下のようなものがありました。

- ・春学期に習った文法や単語を留学生との会話で使って定着させる。
- ・聞き取ってもらえなかった語彙の発音練習を手伝ってもらい、正しい発音を身につける。
- ・上手に話せるかどうかの前に恐れることなく話しかける。
- ・日本の文化や歴史についてカンボジア語で説明できるようにする。

そして、終了後には、各自の目標の達成に関するレポートを提出します。

今年のタンデム学習は、4 人ずつのグループ（留学生 1 名と本学学生 3 名）にわかれ、5 日間、以下の活動を行いました。

授業計画

- 1 日目 自己紹介、日本語の紹介、文化紹介（舞踊）、言語ゲーム
- 2 日目 外国語学習に関する講演、ポスター発表（出身地紹介）
- 3 日目 学外研修（江戸東京博物館、浅草寺）
- 4 日目 プレゼンテーションの準備と発表（小型影絵人形）
- 5 日目 総括、閉講式



名前に関するポスター発表

タンデム学習（１）：

自分の名前について、名前の意味や、使っている漢字について詳しく紹介しあう。

タンデム学習（２）：このプログラムのために本学カンボジア語専攻の学生が作った、「カンボジア語で学ぶ日本語教材」を用いて、文字、音、文法、基本的な表現など、日本語のしくみを紹介する。授業の最後に、留学生が簡単な日本語のスピーチができるようになるのが目標。



日本語学習の様子

タンデム学習（３）：

引率として同行したガエト・ダロー先生の外国語学習に関する講演会に参加し質問をする。



ダロー先生の講演を聞く

タンデム学習（４）：自分の出身地について、詳しく紹介しあう。

学生の声：興味を持ってもらえるようにできるだけ多くの情報を盛り込み、ポスターのイラストも見やすくした。目標通り、原稿にはできるだけ新単語を使って文を作った。発表本番、がちがちに緊張したが、ソパニムさんは私の話すことを非常に熱心に聞いてくれた。発表後はその一つ一つに丁寧に質問してくれ、私は先輩方に手伝ってもらい、出来る限りその問いに答えることができた。最後にソパニムさんが秋田県に行ってみたいと言ってくれた時には心の底から嬉しかった。

[<ビデオ：ボラマイさんのポスター発表>](#)

タンデム学習（５）：物語を作成する。

カンボジアの伝統芸能である影絵芝居のうち、小型影絵の人形を使って、各グループで物語を作り、上演する。



小型影絵の人形と



グループで自作の物語を熱演

タンデム学習（６）：言語を使ったゲームや、踊りの文化紹介



言語ゲーム（１）



言語ゲーム（２）



文化紹介（踊りの足さばきを習う）

以下に、本学学生のレポートから、以下に抜粋を挙げます。また、2年生（初参加）、3年生（2回目の参加）、4年生（3回目の参加）それぞれの観点からのエッセイを全文掲載します。

< 自信がついた >

・去年の自分は前述したようにとにかく受け身で先輩を頼ってばかり、自ら進んで会話に入っていこうとは思わなかった。しかし今年は、自分から積極的にこの単語はどういう意味？と留学生に尋ねたり、逆に留学生の質問に答えたり、1年生に助けを求められたら答えることもできた。そして、伝



江戸東京博物館にて

えたいことが伝えられるように、聞いたことが理解できるようになり、会話を楽しむこともできるようになった。何より自信がついた。もう、去年の自分はどこにもいない。新たな自分になることができたのだ。

・カンボジアについて知りたいことや話していて分からない事は質問する、ということも、伝わらないかもしれないけれど一度話しかけてみようという気持ちで躊躇なくできるようになった。なんでもとにかく話してみて気づいたことは、相手はさほど私の間違いを気にしないし、必要があれば訂正してくれるということ、何より自分が使える表現がぐんと増えるということだった。

< 語学力がついた >

・昨年は先輩に通訳してもらったり、単語を教えてもらったりして何とか留学生と話せる状況だったが、今年は自分の力で会話ができることが多く、自分のカンボジア語の上達を実感することができた。留学生からは文法がしっかり身に着いていてすごいね、と褒められた。

・春学期は次々と入ってくる新しいことを整理することでいっぱいでしたが、復習してみると、覚えきれてないことがいくつもありました。例えば、「～できる」という意味の単語にも baan 以外に ceh と ruoc もあります。いつも baan を使ってしまいましたが、よく聞いていると留学生は使い分けていて、復習していたからこそ聞き取れたし、いつどの「～できる」を使っているのかを参考にすることができました。

・「わからない単語は聞けるだけ聞く」これが今回の課題だ。幸いカンボジア語で「カンボジア語ではこれはなんというの？」

という言い方は分かっていたのが助けだった。私が訪ねる度にマイは私がわかるまで教えてくれた。ネイティブが話す言語を学ぶことは最初こそ難しいものの語彙が増すにつれ少しずつモチベーションにつながった。

・たった 5 日間だったけど、自分としては自分のカンボジア語運用能力が向上したと思う。その大きな要因は、カンボジア語をたくさん使ったからだと思う。とても単純なことではあるが、簡単な構文でもたくさん使って留学生とたくさんコミュニケーションをとることで、通じないかもしれない、という不安感が消える。こんなにカンボジア語を使う機会なんて、留学するまでないと思っていた。今回は日本でのプログラムだったけど、まるで自分がカンボジアに留学しているみたいにカンボジア語に囲まれた 5 日間だった。

< 留学生から刺激を受けた >

・彼女は常にノートを持ち歩いていて、何か日本のものを教えると必ず、読み方を描いてほしいといって渡してきた。私は彼女の、一生懸命日本を理解してくれようとするその姿勢に、もっとこたえたいと思った。カンボジア語は勿論、日本文化のことも我々日本人が学ぶことの大切さを実感した。



江戸東京博物館にて（ミャンマー班と合同で）

・博物館や浅草で質問されるであろうことは予測して単語を調べたりしていたが、まさか聞かれるとは思わなかったことには全く対応できなかった。「なんで自動販売機のジュースは高いの?」「パスモってどういう意味?」など自分が普段意識していないこともカンボジア人にとっては疑問になるのだということが印象的だった。



浅草寺にて

<カンボジアについて理解できた>

・浅草散策の日に聞いたカンボジア人の考えがとてもおもしろかった。カンボジアでは、女性はシャワーを浴びたりお皿洗いをしたりしているときに歌を歌うこと、音を立てて歩くこと、夜遅くに出歩くことなどはよくないとされているらしい。日本にも同じような性別期待徳目があるが、具体的な禁止事項の違いは興味深かった。

-タンデム学習の成果 1：今後のカンボジア語学習に向けて

佐藤ゆき

今回の集中講義では初めて気づくことが多くあった。

まずカンボジア語という言葉についてだが、普段の文法の授業や教科書に基いたネアックルー（本学の客員教授）との会話の授業だけでは学習しきれないことがあった。例えば会話と文章によって使い分ける言葉があるということも授業の中で学習していたが、やはり実際の会話を通してその用法を知ることが非常に有意義なことであった。

また一緒に話している時に私の話すカンボジア語が間違っていたら直してくれたり、発音を丁寧に教えてくれた。その際もただ正しい使い方や発音を教えてくれるだけでなく、状況によって異なる使い方まで教えてくれた。



浅草にて（筆者左端）

さらにネアックルーや日本に約 1 年留学に来ていた留学生はゆっくり話してくれるが今回の留学生は普段のスピードなので最初は聞き取りが難しかったが、先輩の助けを借りたり、留学生が徐々にゆっくり話すようになってくれたりして少しずつコミュニケーションが取れるようになった。

また今回の留学生の皆さんはとても学習意欲が高く、さらに主体性が強いと感じた。私の班のパンニャー君について言えばゲームの時にいち早くゲームのルールを理解し、戦略を練ったり、影絵の劇の時には自分から物語を作るなど非常に積極的な印象を受けた。もし逆の立場で私がカンボジアに行ったら自分以外全員がカンボジア人の班活動をするとなってもあそこまでのリーダーシップを発揮できない。またこれは他の留学生も然りなのだが自分から積極的に臆することなく質問したり意見を言っていて凄いと感じたし、またその姿を見習っていききたいとも強く思った。

留学生たちと会話したり、先輩からアドバイスを聞く上でもやはり語彙力を増やすことが本当に大事だと感じた。言語が異なるので必然ではあるのだが自分の言いたい日本にぴったり当てはまるカンボジア語がないことも多々あるし、その逆も

もちろんある。しかし語彙力があれば他の言葉で説明して補うことも可能になる。そもそも自分は基本的なカンボジア語の語彙力が全く足りていないので秋学期以降の授業で集中して取り組んでいきたいと感じた。

また江戸東京博物館の案内ではまず日本人である私たちが知らないことが多く、自分が調べた範囲外のことを聞かれてしまうとカンボジア語を話せるかどうかの前に日本語でもわからないと言う状況になってしまった。留学生にカンボジアのことを聞いてもたくさん答えてくれるのに、自分が答えられないのは恥ずかしいし悔しく感じた。自国のことをもっときちんと説明できるくらい知るべきだと痛感した。

最後に今回の集中講義についてだが、この5日間は私にとって今後カンボジア語を学習していく上での大きなモチベーションになった。正直なところ、つい先日まで毎日ただただ予習やテストに追われ、精神的にカンボジア語学習への姿勢が怠惰になってしまっているところがあった。しかし、カンボジア人の留学生と自分の力でもっと多くのことを話したいと感じた。今後の授業でもこの5日間のことを思い出して積極的な学習を続けていきたいと思う。この東京外国語大学に入ってから最初の夏休みに、一生自分の中で忘れられない経験を得ることができたし、やはりこの大学に来てよかったと感じることができて良かったと思える5日間であった。

-タンデム学習の成果 2：繰り返すことで身に付ける力

長島菜都

今回私がこの講義の目標として設定したことは、1.留学生との会話の中で、聞き取ってもらえなかった語彙の発音練習を手伝ってもらい、正しい発音を身につける。また、その中で自分の苦手な発音を明確にし、それを課題として集中講義期間、またその後も意識的に習った発音を心がけて使うようにする。2.新しい語彙、特に大学生が普通の会話で使う新し



影絵芝居を終えて（筆者右端）

い表現などがあれば、積極的に教えてもらい、1日に3～5個は覚えるようにする。の2つだ。

この2つの目標を達成できたかと聞かれれば、できたとは言えない。去年に比べたら格段とカンボジア語の力も上がり、留学生と積極的にコミュニケーションをとることができたが、やはり会話の中で、伝える・理解することにだけに集中しすぎてしまい、設定した目標への意識を持つところまで余裕がなかった。今はこれが自分の現状レベルなのだと改めて実感した。

しかし今後のモチベーションとしては、今回の講義期間でかなり高めることができた。なぜなら、今学期一生懸命カンボジア語に取り組んできたことが成果として現れたことが明確に実感できたからだ。前年初めてこの講義に参加したが、参加したというよりその場にいただけのようになってしまい、かなり反省の気持ちが強かったが、今回はしっかりと参加できたと思うくらい留学生とコミュニケーションをとることができたからだ。まだまだダメなところはたくさんあり、特に博物館での説明などは難しくて上手くできなかったし、留学生が発表するときは先輩の翻訳にかなり頼ってしまっていたが、自分から留学生に話しかけたり、楽しく笑いあえたことが何より嬉しかった。

これから留学生とコミュニケーションをとる中で意識しようと思ったことの1つは、会話中に分からない単語が出てきたり、話がつかめなくなってきた時は恥ずかしがらずに、ちょっと待ってほしいと伝えたり、単語の意味を聞いたりすることだ。せっかく途中まで話を理解できていたのに分からない単語が出てきた時に思考停止してしまい、気づいたら何の話か分からなくな

ることが多々あったが、そこで質問をすれば頭の良い留学生は易しい単語に置き換えてくれたり、詳しく意味を説明してくれるはずだ。

また、自分の中でうまく文章が組み立てられてなくても、考えすぎずにとにかく話しかけてみることも大切だと思う。話のネタが尽きてきたら、カンボジアのことについて質問すると話が盛り上がるのではないかと今回発見した。簡単だが少し面倒なことを繰り返しているうちに、自然と会話の力が身に付いてくるはずだ。日々の学習の面では、とにかくもっと語彙を増やしていきたい。

また、知っている単語も話している時にパッとでてきて使えないと意味がないことも実感した。例えば、クニョムやサラーなど、簡単な単語は聞いた時に、あれ、なんだっけと悩む時間がないのでスラスラと理解することができる。このように聞き取って一瞬で理解でき、自分が話す時にもパッとでてくる単語を増やしていきたいと思った。そのためにはやはりカンボジア語を意識的にたくさん使っていくことが必要だ。

このように、この講義期間は自分の中で今後このようにしようという思いが具体的に生まれ、また前年からの比較で、やはり語学は勉強した分だけ身に付いていくということを実感でき、かなり実りの多い一週間にすることができた。

-タンデム学習の成果 3 : 3 作目は駄作

野崎翔太

ルネサンス期の劇作家ウィリアム・シェイクスピアはこう言った。「この世は舞台である。」と。なるほど彼の言葉を借りれば、私の人生そのものも舞台であり、この SS プログラムもその舞台上で演じられる一つの作品ということだ。4 年生にして 3 回目となる今回の SS プログラムは、まさしく 3 部作のクライマックスと言える。しかしこの世にはとあるジンクスが存在する。「3 作目は駄作である」。



浅草にて（筆者左端）

私にとって 3 度目にして最後のこの SS プログラムは果たして駄作

であったのか？違う。決して駄作などではない。この SS プログラムは私にとって、過去のプログラムの集大成、いや、この 4 年間のカンボジア語科生活の集大成であった。

今回のプログラムでは、私は一年生 2 人と共にヴィーという女学生を担当することとなった。

3 回目の参加となる私にとって、女学生担当は初めてであったが、ヴィーは初対面から積極的にコミュニケーションを取ってくれたため話題に困ることもなかった。就学約 3 ヶ月ながら勇ましくも SS プログラムに参加した一年生 2 人も、臆することなくカンボジア人学生達とコミュニケーションを図っていた。

私にとって今回の SS プログラムが過去 2 回と異なる点は、私の立ち位置である。3 年間の修学と過去 2 回の経験のおかげで、カンボジア語でのコミュニケーションに不自由することはなかった。しかし私に期待されたのは、4 年生としての立ち位置である。グループの活動が円滑に進むようまとめ、未来のある一年生達がより活発に参加できるように働きかけることだ。上述のように、一年生達の積極的な姿勢故に、私がそれを促す必要は一切なかったが、一年生への通訳という点で、一年生の活動へ貢献することができた。

反省すべき点は、自身の日本文化に対する知識不足である。今回の SS プログラムでは、過去 2 回にはなかった、江戸東京博物館訪問が含まれていた。日本文化の勉強不足が祟り、カンボジア人学生からの質問や疑問に正しく回答する

ことができなかった。だれかシャチホコの役割について教えてくれ。

4年間の大学生活の中で、呆れるほどに何度も聞かれた質問が私にはある。「カンボジア語勉強して将来役に立つの？」という質問だ。全く世間知らずで滑稽なこの質問に対し、私は毎度愛想笑いで済ませていた。しかし今日この場で、はっきり明言しておこう。大学四年間かけて学んだカンボジア語を将来使える機会などほとんどない。だからどうしたというのだ。それがどうしたというのだ。

私はこの4年間大学でカンボジア語を専攻してきた。日本にしながら日々カンボジア語に向き合い、毎日の予習復習をこなす大学生活を送った。その成果として、まさしく右も左も分からなかった1年目2年目から、カンボジア人学生と意思疎通を図ることのできるレベルに成長したのである。なにかに打ち込み、努力し、成長を遂げる。このなかが無駄であったと言うのか。

この大学4年間は私にとって決して無駄ではなかった。このSSプログラムは、私にとって決して駄作などではなかった。それは私の大学生活、カンボジア語学習の集大成であったのだ。

-タンデム学習の成果 4 : 3 年続けて観察した季節感

熊耳 崇

今年もかぼちゃの国から留学生がやってきた。いや、発展目覚ましい仏教の国からというべきか。今年もまた S S である。カンボジアからの留学生との濃い時間を一週間ほど共有する、例の印象深いプログラムである。早いもので、私がこのプログラムに参加するのはこれで三回目となる。一回目二回目と、私のカンボジア語運用能力のなさを露呈する結末となった興味深いプログラムであるが、今年はどうであったか。大学 4 年生という立場で臨んだ今回は、最終学年としての責任を果たせたのか。留学生には日本のあらゆる事物に対し事細かな説明をし、下級生には救いの手を差し伸べてまなざしの目で見られるような大活躍の働きをなし得たのか。



閉講式にて、林学長と

その答えは、残念ながらイエスと言い切ることはできなかった。毎年と同じように、自分の知る範囲の語彙の中でしどろもどろになりながら、懸命にコミュニケーションの橋を築かなければならなかった。このプログラムの中で掻いた汗は暑さのせいだけではなかった。ただ、成長をじかに感じれた部分もあった。それは、カンボジアの留学生がどこに興味を持つのかという勘所が分かった点だ。これはもう、亀の甲より何とやらの範囲のため、正規の運用能力という点では正しくないのかもしれない。だがしかし、それでもどこをツッコむか先回りして分かっていたので、どのような語彙を使うか、どのような論理にするかを先回りできた点はこのプログラムに毎年参加してきた成果であろう。

さて、前置きが少しどころではない長さになったが、ここから一番伝えたい内容について書きたいと思う。それは、季節感についてだ。3 年間、このプログラムに参加してきて、面白いことにプログラム開催時期がすべて 2 か月ごとにずれていった。最初の開催時期は大学の大学祭と同時期で木枯らしが吹く 11 月、2 回目は秋学期が目前に迫り、長雨がしとしと降る 9 月、そして今回の開催は春学期終了直後、夏の始まりの 7 月であった。すべて開催時期がずれているが、留学生たちはその各々の季節に対してそれぞれ違う感慨や興味を受けたようであった。開催順に記述していきたい。

まずは、私が 2 年次のときに参加した 11 月。われらが外語祭と同時期開催で留学生を語科店に連れて行ったのを覚

えている。この時期で特筆すべきは寒さであろう。やはり、カンボジアからの留学生にとって寒さというのは物珍しく、口から出る白い息に目を輝かせていた。また、葉の落ちた木に大変な興味をもって日本人たちが紅葉に感動するさなか、裸木の写真を撮りまくっていた。寒さというものに対する考え方が日本人と決定的に違っていた。

次は、私が3年次のときに参加した9月。秋の長雨の時期に丸被りして傘の出番が多かったように思う。この時期は日本人にとってはそこまで寒いわけではないが、カンボジアに暮らしている彼らにとっては寒いレベルであったようだ。また、この時期にはたくさんの種類の植物が実をつけたり、花を咲かせる時期である。彼らは僕たちに比べ植物についての知識が段違いに多く、とても丁寧に食べれるか否か、食べれるならどのように食べるのかを詳細に話してくれた。豊穡の季節に彼らの知識の豊富さに圧倒された。

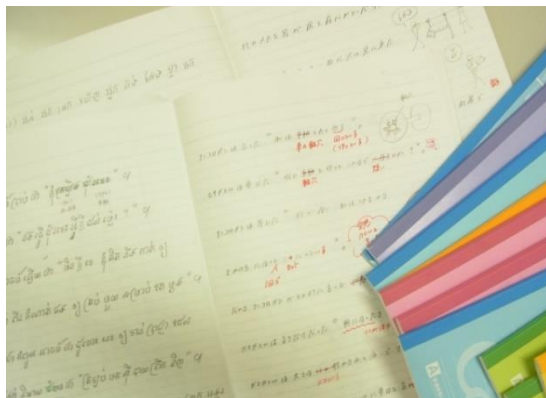
そして、最後は今回のプログラムである。前半は梅雨の雨にひっかかってしまい、残念な空模様であったが、後半になるにつれて青空が広がり、暑さも高くなっていった。この時期に至っては日本の暑さもなかなかということを彼らに伝えられると思っていた。しかし、彼らにとっては暑さなど慣れ親しんだものであったようだ。彼ら曰く、カンボジアの方が暑い、この程度の暑さなど長袖来ていられる、とのことである。完敗だ。一年に3か月ほどしか暑くならないこの国では暑さ勝負では勝ち目がなかったようである。以上、僕の目を通した彼らの季節への考え方をまとめてみた。気温の上下が激しい国とそうではない国ではそもそもの捉え方の違いがあるようだ。

⑧ 学びたいことはここにある—カンボジア語スピーチコンテストまでの道のり—

国際社会学部 カンボジア語科 1 年 野口亜依

カンボジア語との出会い

2019 年の春、入学して初めてカンボジア語と出会った。はじめのうちは文字も読めず、その言語と向き合うのに精一杯、毎日の電車の中で必死に単語を覚え、その日の授業とテストに何とかついていく日々だった。それでも習ったことは次第に頭の引き出しから抜けていってしまう。時間が空けばそれまでにやったことを忘れない



1 学期（3 か月）で使ったノート 1 2 冊

ために復習し、同じ言葉が繰り返しノートに並んでいった。

そんな歯がゆい日々も、同じ単語を見る機会が増え、ネイティブの先生の話が少しずつ聞き取れるようになることで、片言ではあるがカンボジア語を使えるようになる喜びを覚えた。

カンボジアからの留学生

大学の研究室にはいつも、カンボジアから日本に学びにきている留学生がいて、交流する機会が次第に多くなっていった。私のつたないカンボジア語で彼女たちと会話できたのは、何より彼女たちの純粋で素敵な人柄のおかげだ。彼女たちは、今まで私が当たり前と思っていた、言葉や文化、学ぶことの喜び、その一つ一つをとっても大切にしていた。私は彼女たちの生き方や学ぶ姿勢にこれからの人生について考えるきっかけをもらえた。生まれも育ちも異なる彼女たちと同じ時間を過ごし、共に笑うことができる、そのことが私にとって何よりかけがえのないものとなっていった。

私が初めて出会った留学生たちはその夏、カンボジアに帰っていったが、彼女たちとは今でも時々連絡を取り合っている。今は、彼女たちが日本を見たように今度は私がカンボジアを見たいと思うのだ。そして彼女たちには心から感謝の気持ちを伝えたい。

スピーチコンテスト

カンボジア語スピーチコンテストに出ることを決めたのはそんな時だった。カンボジアに行ったことのない私にとって、カンボジアについてスピーチするということは、内容的にも言語的にも至らないことだらけだったが、留学生たちと話して学んだことを率

直に話すことが今の私にできる精一杯だと思った。書きたいことを何とかカンボジア語に翻訳して、ネイティブの先生に添削してもらい原稿を作ると、留学生や同じ語科の人たちに練習を見てもらい、発音や話し方について多くのアドバイスをもらった。

それでもなお、本番では緊張したが、おじけづいたら負けだ、心は態度に現れる、と思い堂々と話すよう心掛けた。2位として自分の名前が呼ばれた時には本当に驚いたが、これまでカンボジア語と向き合い学んできたことが成果として現れたのかと思うと、カンボジア語を学ぶことができた時間、そしてそれを支えてくれた人たちに対する感謝の気持ちで一杯になった。

これから

今回のカンボジア語スピーチコンテストを通して私は、学ぶことの喜びと学べることのありがたさに改めて気づかされた。これからもこの気持ちを忘れずに、何事にも真摯にそして愚直に向き合っていきたい。

そしてこの冬、私は初めてカンボジアを訪ねようと考えている。実際にその地を訪れてでしか見ることのできない景色をこの目にできるのが楽しみだ。

⑨元交換留学生在カンボジア文学研究賞受賞

元留学生のチュोक・ソピア（Chouk Sophea）さんが、カンボジアで文学研究賞を受賞し、現地メディアに取り上げられました。ソピアさんは、2016 年度に TUFS-ISEP 生（交換留学生）として本学に 1 年間留学し、2018 年度には大学の世界展開力強化事業「日本発信力強化に貢献するミャンマー・ラオス・カンボジア知日人材養成プログラム」により本学に留学しています。現地報道の中で、本学についても触れられています。

チュोक・ソピアさんの受賞感想

このたび、2021 年第 6 回「全国読書の日」における文学研究部門で優勝することができました。ISEP 生として 1 年間留学した東京外国語大学での経験があってこそその結果だと思い、感謝しています。

< 以下の記事は、Sovrin Magazine (www.sovrinmagazine.com)の許可を得て翻訳しています >

2021 年第 6 回「全国読書の日」における文学研究部門の第 1 回優勝者



今年の3月に行われた「カンボジア社会におけるリアムケー（カンボジア版ラマヤナ）の文学的価値」をテーマとした文学研究部門の公式審査結果として、ナート・ブンルアン評価委員長は、スーパーサイエンス校であるプレーク・リアブ中高一貫校の教員が優勝したと発表した。この優勝者は、2021年に教育・青少年・スポーツ省から文学的成功の栄誉を称えられるまでに、どのような経歴と業績をたどったのだろうか。

チュोक・ソピア氏（Chok Sophea）は25歳で、王立ブノンペン大学国文科を卒業した後、同大学大学院でカンボジア文学を専攻中です。ソピア氏は、学部3年次に奨学留学生として、日本の東京外国語大学に1年間留学し、2018年の修士課程でも、再び東京外国語大学で学ぶ機会を得た。



東京外国語大学にて、林佳世子副学長（現学長）から修了証書授与（2018年）

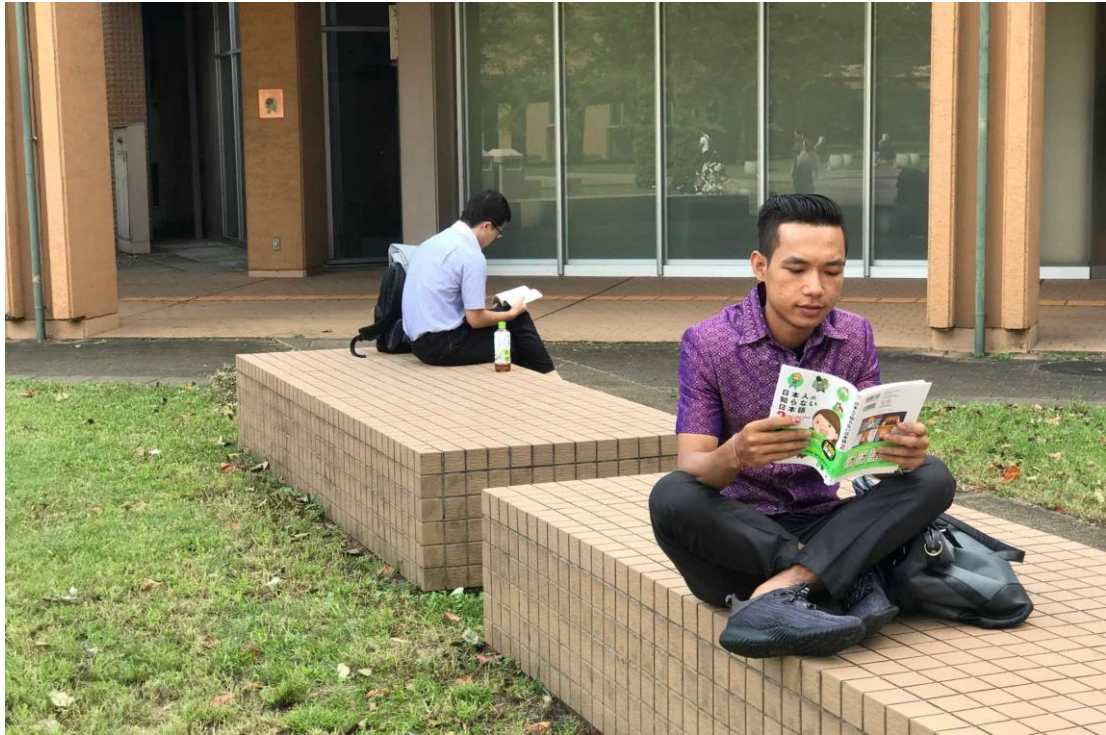
ソピア氏は、優勝した文学研究部門への応募理由について、リアムケーの物語に対する深い情熱、とりわけ装飾への関心によるものと述べた。この物語はそれぞれの役を演じる演者によって二度楽しむことができる。ソピア氏の心の中には、この物語が、芸術を通じて、すなわちルカオン・カオル劇、大型影絵劇、彫刻、絵画、歌を通じて、深く刻まれている。また、文学者であるケン・バンサック博士のインタビューや、パウ・サベロス博士の研究発表も聞いていたことが応募研究につながった。さらに、ソピア氏はカンボジア作家協会の会員でもあり、文学界の先達であるサム・チュムブン氏、サオム・ソモニー氏、サム・チュムロン氏から多くの助言と指導を受けた。また、協会を通じて、研究のためのデータとなる文献を収集できたという。



カンボジア作家協会理事と

ソピア氏が優勝を勝ちとった理由はなんだろうか。「リアムケーは偉大な物語であり、あらゆる形で研究されてきました。カンボジア社会におけるリアムケーの影響に関しては、まだ研究の余地があります。いずれにせよ、私は、国王陛下、王国政府から一般庶民に至るまで、現在もこの物語を好む人々に対する影響を示す新しいデータを収集し分析し、さらにそのデータは信頼できる正確なものでした」とソピア氏は述べた。

ソピア氏が文学部門で栄誉を得たのはこれが初めてではない。2020 年の仏教研究所主催の詩歌部門でも 2 位を獲得している。しかし、今回の優勝は喜びもひとしおだという。ソピア氏は次のように述べた。「優勝したとわかったとき、母のところに駆け寄って抱きしめました。母には本当に感謝しています。応募準備中の約 1 週間、家事の手伝いがほとんどできなかったからです。母は年をとっていますが、私のことを理解し、研究を優先させてくれました。また、この研究に力を貸してくださった先生方、先輩方、カリキュラム開発部門の皆様に心から感謝します」



東京外国語大学のキャンパスにて

優勝した後も、ソピア氏は、文学解釈を作家協会のウェブページに投稿するなど、文学を学ぶ人々のための活動に意欲的に取り組んでいる。また、「古典文学にみるカンボジアの哲学」というテーマの修士論文を執筆中である。

ソピア氏は、文学研究を志す後輩たちに向けて、予想ほど容易な道ではないので意志を強くもつことを勧めた。文学研究賞に応募したいのであれば、文献をたくさん読むこと、事前に指示とテーマをよく確認すること、自らの意見を順序だてて美しい文章で述べること、根拠となる文献を示すことが大切であるという。さらに、審査では審査員の前でプレゼンテーションを行うため、自信と話術も大切であるという。

Article by SRIN SOKMEAN

All Rights Reserved by Sovrin Magazine (www.sovrinmagazine.com)

https://sovrinmagazine.com/site/view_article?artid=1477&fbclid=IwAR1YyliNuk-KwmLrWBHK79E-8un8yxfJDwlvIXuxIJvcFcu3ICQPBC-5lw0

原文：カンボジア語、日本語訳：東京外国語大学カンボジア語研究室